

# 傾斜

# Inclination

ウィリアム・シャン  
William Shunn

Nippon2007 ヒューゴー賞候補作品 ノヴェラ部門  
Nippon 2007 Hugo Nominees Best Novella

黒澤由美訳

本作品は原作者の希望により、第 65 回世界 SF 大会／第 46 回日本 SF 大会

Nippon2007 参加者向けに翻訳・公開されているものです。

無断複製・転載を禁止します。

Nippon2007 実行委員会

マニュアルの教えによると、はじめに建造主様は根源となる6つの機械をお定めになった。この6つは建造主様の6つの相であり、すべての行いはこの6機械によって行われねばならない。それ以外の機械は不要だ。

ぼくはこれを心から信じている。本当だ。それでもたまに第7の機械があるような気がするときがある。冒瀆的な亡霊のようにさまよう、人知を超えた第7の機械が。

ぼくの何かがおかしく、それが何なのかわからなかった。

#

ぼくは門限に遅れてびくびくしながら、ドアノブとはいえないドアノブをつかんだ。

ここはマシーニスト・クォーターだ。ネザービュー・ステーションの環B上にあるほんの小さな区画だが、ぼくの知るかぎり、ぼく以外にここから出たことのある子はほとんどいない。クォーター内ではFo重力が常にオフになっているため、ここではたった0.25Gの重力しかなかった。ステーションの回転と、ハブとの2キロの距離で生じる重力はそれだけだからだ。それが“クォーター（4分の1=0.25）”という名の由来だ、と冗談で言うこともある。もちろん、その名の由来はステーションとの容積比率でもない。

ぼくが父トーマスと二人で暮らしているキャビンは、〈斜面〉分区第3通路の左側12番目のハッチにあった。ぼくはハッチの前に着くと、帽子のつばをまっすぐに直し、カバーオールのをぼしてから（どちらにも〈斜面〉分区を示す直角三角形のマークが青みがかったグレーの糸で刺繍されている）、静かにドアノブを回した。デッキに埋め込まれた照明の光で、両側の隔壁にぼくの影が映し出される。ドアノブの動きはまるで軸のある本物の機械構造のように見えるが、もちろんそうではない。単純な機械構造のドアノブなら、ぼくやトーマスが触るだけで開錠したりはしない。こんなまがいもののドアノブは大嫌いだ。本当は均一的な革新技術で作られているくせに、美德と分化と純粋さを備えた機械をまねている嘘臭さがきらいだ。このドアノブが隠しているものがきらいだ。ぼくを締め出しておいてくれないところがきらいだ。

建造主様に黙祷をささげながらハッチを押した。ハッチは、蝶番の動きを装いつつ、音もなく内側に開いた。トーマスが寝ているかもしれないので、音を立てないようにして中に入る。滑り止め付き安全靴はしのび足に好都合だ。けれど中に入ってみると、グレーの短いアンダーオールを着たトーマスが、寝台に座ってぼくが入ってくるのを見ていた。ぼくの後ろでハッチが勝手に閉まる。本物のドアなら自動的に閉まったりしない。キャビンは狭く、奥の隔壁に貼られた基本6機械図とその下の床に固定された小さな木製衣装箱のほかはほとんど何もなかった。室内にただよう金属っぽいにおいが、トーマスの険悪な顔つきに似合っている。狭いキャビンだから手を伸ばせばトーマスの白髪ま

じりの巻き毛に触ることだってできたはずだが、ぼくはもうめったにそんな気持ちになれなくなっていた。どっちみち、トーマスの怒りを簡単にしずめることのできた日々はとっくに過ぎ去っていた。

「遅い」トーマスは言った。焦点のずれた遠くを見るような目でぼくの方を見ている。ときどきやるしぐさだ。腕時計を見もしない。トーマスの腕時計は本物の機械構造を持つクロノメーターで、内部には精巧な金属部品が使われ、革新技術は一切使われていない。輸出商としてのトーマスの地位を示すシンボルだった。「門限を過ぎていぞ」

「ごめんなさい」ぼくはそう言いながら背を向け、トーマスの寝台とは反対側の隔壁に収納されている自分の寝台のクランクに手を伸ばした。

トーマスは鉄を研ぐようないらだった声をあげた。「謝るくらいなら最初から時間を守れ」

ぼくの肩がびくっとする。何も言わずに寝台を下ろしにかかる。

「ジュード、お前ももう 15 歳だ」トーマスは言った。「いまだにいろいろとうるさく言われなきゃならないわけがわかるか？ え？ どうしてだ？」

ぼくは肩をすくめようとしたが、操り人形のようにぎくしゃくした動きになってしまった。「ジムで修練の順番を待っていたんだ」ぼくは偽物のクランクをつかんだまま言い訳した。「その、ニックたちと一緒に。だけど職長たちがいて——なかなか順番がまわってこなかったから、それで……」

トーマスが立ち上がった。首の真後ろから話しかけられて背骨が震える。「おれはお前を探しに行ったんだ。ニコデマスとは 1 時間前に会った。ジムじゃなく〈斜面〉区でな」

ぼくは凍りついた。2 つ言った嘘のうち、1 つがもうばれてしまった。ニコデマスはぼくの親友だ。いや親友だったと言った方がいいかもしれない。ぼくは最近ニックを避けていた。2 週間前、ぼくとニックは学校に遅くまで残ってモーターを組み立てていた。ニックがぼくのモーターのタイミング調整を手伝おうとしたとき、ニックの指がぼくの手甲に触れた。偶然の出来事だった。ニックとは小さいときからずっと友だちだったのに、そのとき初めてニックに出会ったような気持ちになった。思わずニックの顔に触れなくなかったが、思いとどまった。恐ろしいことに、そのときぼくにはそれが間違っただことだという気がせず、だからこそなおさら怖くなった。

もちろんそんなことはトーマスに言えない。時間どおりに夕方の修練へ行くのがどんどん苦痛になってきている理由だって言えなかった。服を脱いでシャワーを浴びる洗浄室は、ぼくにとって恐怖だった。みんなは人前で裸になっても平気そうだったけれど、ぼくには苦痛だった。人に裸を見られていると、自分の皮膚をはぎ取りたくなる。

ぼくの寝台はまだ下り切っていない。振り返ってトーマスのほめめかすような非難に言い訳したいのに、混乱して言葉が出てこなかった。頭の中で言葉がほこりのように舞

うばかりでうまくつかめない。こんなこと、どうして説明しなきゃならないんだ？ 何でわかってくれないんだ？ だいたい父さんには関係ないじゃないか？

「なんてことだ、ジュード」トーマスはぼくの背中に向かって言った。「お前に嘘をつかれたら、お前を仕事に出しても信用できないじゃないか」

その言葉にぼくは手を止め、振り向きそうになった。

「そう。お前の仕事を決めてきた。わかってるな？ ハブでの仕事だぞ」

目の前が真っ暗になった。クォーターの外で働く？ どこまで悪いことが続くんだ？ 「今夜はよく寝て明日の朝早く起きなきゃならんというのに、とっくに寝てるはずの時間にお前は外をほっつき歩いて、建造主様のみご存知のことをしていたというわけか。おれはお前をそんなふうに育てた覚えはないぞ。違うか？」

首の後ろに唾がかかる。ぼくは本当に修練の順番を待っていたんだ。本当だ。そう言いたいのに、言葉が出てこない。

「おれが聞いたら返事をしろ！」トーマスはどなるとぼくの腕をつかんで振り向かせた。〈斜面〉のマークの付いたぼくの帽子が勢いで飛んだ。

トーマスの痩せた脚に力が入り、たるんだ腹がふるふると震え、灰色がかった顔は怒りにゆがんでいる——ぼくの方が背も高く、体も大きいのに、おしおきに身構える気持ちは5歳児のときと変わらなかった。

トーマスはぼくを揺さぶった。「父親の言うことを聞かないと、地面に足をつけて生きていけないぞ！」

ぼくの目にたまった塩辛い液体が震え、目の前にしづくが飛び散る。気が付くと思わず口走っていた。「ここには地面なんてないよ。金属だけだ」

トーマスの顔色が変わった。いきなり体をひねると、ぼくをキャビンの反対側へ投げ飛ばす。ぼくの体重はたったの20キロだから、それくらいのことは簡単だった。ぼくはトーマスの寝台にうつぶせに投げ出された。

体をあおむけに返すと、トーマスが上から両手を振り上げ、こぶしを震わせていた。ここ何ヶ月は殴られずに済んでいたのに、珍しく続いた幸運もこれで終わりかと思った。けれどトーマスは腕を下ろし、ぼくの方へかがみこんだ。

「お前の中には破壊者がいる」そう言って人差し指を突きつける。「破壊者の支配を振り切るために、心から祈れ。まっすぐで間違いのない人間になれるよう祈れ。明日はこれまで以上に建造主様のご加護が必要なんだぞ」

それからトーマスはカバーオールを着ると、怒りをしずめるためにキャビンを飛び出して行った。その後ろで、仕上げの釘をそっと打つように、ハッチがカチッと閉まる。残されたぼくは、寝台からずるずると床へ下り、膝をつき、帽子を拾うと、祈り始めた。

ぼくはまっすぐでなくなっています。ぼくには修理が必要です。ぼろぼろ泣きながら、ぼくは建造主様に祈った。ぼくをもっとよい息子にしてください。もっと強い労働者に

してください。まっすぐな人間にしてください。肉体的にも精神的にもどうかぼくをお守りください。どうか、明日の朝、父が本気でぼくひとりを生体改竄者たちの中に送り込んだりしませんように。

だが、ようやく自分の寝台に入って毛布にもぐりこんだとき、暗闇の中でぼくを見守る者として心に浮かんだのは、建造主様ではなかった。ぼくの心に浮かんだのは、いまは亡き母カイヤだった。母はぼくの上に真っ白な天使の翼を広げていた。

## #

建造主様はぼくの願いを聞き入れてくれなかった。少なくとも生体改竄者たちについては。

翌朝、トーマスとぼくは早く起きて身支度をし、キャビンを出た。トーマスはパンが1個入るくらいのグレーの布袋を片手に持っている。

この時間に起きているのはジムへ向かう熱心な信者だけだった。トーマスは彼らと同じ方向へは向かわず、隣の分区との境界へぼくを連れていった。そこには〈斜面〉分区の職長ソールが住んでいる。同じ並びのほかのキャビンと違うところは、ハッチの真ん中に付いた小さな差し金のマークだけだ。

トーマスがノックすると、眠そうな目をしたソール職長がハッチから出てきた。「セラ、ジュード」そうあいさつした職長の顔には、ぼくへの哀れみと不吉な気配が浮かんでいる。「ブラザー・トーマス、少し君と二人で話したい。すぐ済むよ、ジュード」

トーマスはぼくの方を見もせずソールについて中へ入った。通路に残されたぼくは心の中で建造主様の掟を唱えた。全6篇の半分も行かない〈てこ〉の篇を唱えているときにハッチがまた開いた。ソールが中へ入れと手招きした。

ソールのキャビンはトーマスとぼくが住むキャビンより少し小さいため、3人も入るととても狭い。トーマスは1つしかない寝台の端に座り、布袋を膝の上に置いていた。トーマスが自分の隣をたたいて示したのでぼくはそこに座った。ソールは奥の隔壁に取り付けられた折りたたみ調理台から保温ポットを取り、注ぎ口から危なっかしく一口すすった。室内はかすかに粉コーヒーと機械油のにおいがした。

「ジュード」ソールが言った。「昨日の夜遅くトーマスから聞いたが、トーマスはお前にドックでの荷役の仕事を手配したそうだ。今日の朝からすぐに仕事を始めねばならず、遅れると罰金が科される。だから残念だが、クォーターの安全域を離れる場合に通常行う事前指導をすべて行う時間はない」

ソールが横目でトーマスに非難の視線を投げかけたのをぼくは見逃さなかった。けれど、トーマスは知らん顔をしていた。いつもどおりじれたように唇をゆがめて座っている。

「それならこれまでも2回くらい外に出たことがあります」この緊張感を破りたい一心でぼくは言った。そうでもしないと首が動かなくなりそうだった。「その、もっと子供のころにですが」

「うむ」ソールはため息をもらすように言った。たるんだ目を数回しばたたく。ソールはトーマスより高齢で、トーマスより背が高く、トーマスより穏やかだが、トーマスほど悲しそうではない。ぼくは自分の悩みと疑問をソールに打ち明けたいと思うことが何度もあったが、どうしてもできなかった。「ジュード、お前は賢い若者であり、前に生体改竄者のいるところへ行っただけだから、向こうの様子をまったく初めて見るわけではないだろう。だが、1、2度父親に連れられて行くのと、たったひとりで彼らに交じって毎日時間いっぱい働くのでは、全然違うのだ。事前に適切な指導を受ける時間がないのなら、せめて祝福の祈りを唱えてやろう」

「お願いします」ぼくは答えた。気持ちが少し軽くなった。建造主様はぼくの祈りは聞き入れてくれなくても、ぼくの知る誰よりも信心深い職長の祈りなら聞いてくれるはずだ。けれど同時に、どれほどの信仰的危険が待ち受けているのか不安になってきた。トーマスはどうしてぼくをこんな目にあわせるのか。

「ここに座りなさい」ソールはそう言って、キャビンの真ん中、トーマスの膝がぶつかりそうなところへ金属製の折りたたみ椅子を置いた。ぼくは急いでその椅子に座り、帽子を取って膝の上で握りしめた。ソールは隔壁のすきまから儀式用の油差しを取り出した。トーマスもソールと一緒にぼくの後ろに立つ。油差しがカチャンと音を立て、その口の先がぼくの頭のでっぺんの髪に触れ、一滴の機械油が注がれる。ソールはそのしずくをそっとぼくの頭皮にすりこみ、ソールとトーマスがぼくの頭に手を置いた。

ほかの子供たちなら、こうした祈りの間、母親もこのキャビンと一緒にいてくれるはずだ。ぼくは目を閉じて、母カイヤがここにいると思いつもろうとした。ハッチ側の隅からぼくを見守っていると。本当にいるかもしれないじゃないか。きっと無駄な願いじゃない。

「偉大なる建造主様」ソールは唱えた。「〈輪軸〉と〈くさび〉と〈てこ〉と〈斜面〉と〈滑車〉と〈ねじ〉の御名において、御前におりますこの忠実なしもベジュードのために祈ります。彼は今日、日々のパンのために生体改竄者たちの中へ働きに行かねばなりません。彼をお守りください、建造主様。彼のへそに健康を、彼の骨に精気を、彼の臆に力をお授けください。働いても疲れぬ力を、心と理性と肉体が破壊者の巧妙な罠にもとらわれない力をお与えください。破壊者ははかり知れないほど狡猾であり、正しくないことを正しいかのように見せます。なれど、建造主様のお力と愛は無限です。建造主様の御心とお知恵を心から信じてこの若者を建造主様のみもとに委ねます。偉大なる建造主様、〈斜面〉が天へ向かって上昇し続け、わたしたちがどうか少しでも御身のおそばへ参れますように。アーメン」

「アーメン」ぼくは言った。祈りの間にどんどん重くなっていた二人の手がぼくの頭から離れた。ぼくは立ち上がり、肩をほぐすように首を回した。

ソールは椅子をたたんで脇にしまった。この狭いキャビンで身に着いたらしい器用な身のこなした。それから手を伸ばして足場握りでぼくの手首の上を握った。ソールの手は暖かく乾いていた。「今日は何曜日だ？ 木曜日か。日曜に礼拝の後で会おう、ジュード。外へ出る場合の指導を少しでも進めよう。何もしないよりはいいだろう」

「この子の予定が合えばそうします」トーマスはこれ見よがしにクロノメーターを見て言った。「あっちではその日を“一曜日”と呼ぶんです。こっちの1週間とあっちの1週間は違いますから」

「そうか。じゃあ何曜日でもいいよ、ジュード」ソールはぼくの腕を握りしめてから離れた。「それから、戒律だけでなく親の言いつけもよく守る者に建造主様のご加護があることを忘れないように」

「ジュード」トーマスが呼び、寝台に置いていた布袋を取ってハッチの方を首で指した。「セラ、職長」ぼくはあいさつをすると、トーマスの後から通路へ出た。背後でハッチが閉まる間に振り返ると、ソール職長は檻の中にぼつんと取り残された獣のように見えた。

それともそれは、こんな目にあわされることへの腹立ちまぎれから、ぼくにそう見えただけだろうか。

トーマスは足早にメイン通路へ出て、ぼくの前を小走りに急いだ。「職長の言うことは気にするな、ジュード」トーマスは首だけ振り向いて言った。「ソールといい、バーソロミューといい、職長連中にはおれたちの経済的現実がわかっていないんだ」

トーマスがぼくたち二人のことを言っているのか、それともクォーター全体のことを言っているのかわからなかった。ぼくが聞き返さなかったのは、これ以上職長をけなすのを聞きたくなかったというのもあるが、メイン通路にはいろいろな分区からやって来た人々が歩いていたからでもある。淡いグレーの帽子とカバーオールを身に着けた人々が、もっと淡いグレーの隔壁の間を歩くクォーターの光景は、昔の白黒写真を見るようだった。

ジムの入口を通り過ぎ、〈くさび〉分区も〈輪軸〉分区も通り過ぎた。もうほかに人影もなくなり、そうして <sup>ブリムム=モビーレ</sup> P M ゲートが見えてきた。さまざまな警告と危険マークがたくさん付いている。

「帰りはお前ひとりで戻って来なきゃならないから、道をよく覚えておけ」トーマスはそう言いながらゲートを開けるレバーを引いた。巨大なハッチが横に開き、向こう側の喧騒と照明が漏れてきた。「ここからは重力に気をつけろ。それから、何をやるにしろ、ぐずぐずするなよ」

心臓がどきどきする。トーマスの後についてゲートをくぐった途端、ぼくの骨に 40

キロ追加された体重がのしかかった。普段からまじめに修練をしているおかげで転びはしなかったものの、ぼくはよろめき、湿った空気の中を少し歩いただけで汗が噴き出た。公共通路はどこも人であふれて騒がしく、まるで千種類の言語を話す人々が昼夜となくバベルに集っているみたいだった。生い茂る草木に覆われて隔壁も見えない。機械信徒<sup>マシーニスト</sup>の身なりをしたぼくはここでは目立つらしく、ぼくたちが通ると、人々——怪物たち——は黙り込んでこちらをじろじろ見ている。彼らの体には奇異な改造が施されていて、ぼくの方も彼らを見ないようにするのは難しかった。トーマスがいなかったら、こんな冒険的な場所を歩くことなど到底考えられない。

ぼくたちは回転方向の歩道に乗り、それから込み合うハブ行きエレベーターに乗り込んだ。エレベーターの中にはとりあえず植物はないようだ。けれど、周りの人間たちは、肌の色や質感が変だったり、手足の数が少なすぎたり多すぎたり、奇怪な人工的装具や突起が体に付いていたり、頭が不気味にゆがんでいたりした。元は人間だったと思われる灰色の小石まみれの生き物とエレベーターの中でちょっとぶつかった。ぼくは失神しそうになって、トーマスにびったりとくっついた。汗が目に入る。トーマスの手がぼくの肩をつかんでいるのは、ぼくを安心させるためなのか、それともぼくをつかまえておくためなのかわからなかった。

ハブ・レベルの隔壁は、金属がむき出しのふつうの隔壁だった。トーマスは、ハッチと通路の入り組んだ短い迷路のようなところを進んで行く。人通りが少なくなり、息がしやすくなった。トーマスは開いているハッチをロックした。中をのぞいてみると、半径 1.5 メートルくらいの球状のオフィスになっていて、球面の内側全体が、モニターやら、コントロールパネルやら、手すりやらで埋め尽くされていた。その真ん中に座っているずんぐりした女には、両脚の代わりにもう一組の腕が付いていた。

「そっちのスケジュールなんて知ったこっちゃないわ」女は見えない誰かと話している。「いくらうちのスティービーたちの仕事が速いといっても、そりゃ無理よ。ええ結構。そうしてちょうだい」

女はトーマスを見た。その両目には銀色の半球状のものがはめ込まれている。女は手すりから手すりへすばやく3回飛び移ってハッチのところまでやってきた。Fo 重力 0.75 のここでそんなことができるとは、この女の力はすごい。

「この子ね？」女が聞いた。

「この子だ」トーマスが答えた。

女はその鏡面のような昆虫じみた目をぼくに向け、首を上下に動かした。レントゲン写真を撮られているような気分だ。ぼくの姿はいったいどんなふうに見えるのだろう。「改造は？ ああ、してるわけないわよね。あんたたち輪住族なんだから。あたしったら何言ってんのかしら。うん、この子は悪くなさそう。まあ、しばらく働いてみてもらいましょう。あんた、名前は？」

口が乾いて舌がもつれる。「ジュードです」

「そう。今日からあんたはここのスティービーよ。荷役人（スティーブドー）だからスティービー」

女は3つの手でハッチの周りの手すりにぶら下がったまま、モーターの爆音のような声で笑った。トーマスも笑った。目を細め、口を大きく開けている。その顔は10年前のトーマスみたいだった。ぼくといるときはトーマスは全然笑わない。

その瞬間、ぼくは何とも言えず悲しい気持ちになった。そしてトーマスを憎んだ。

女は勢いをつけて体を揺らすとハッチの外に飛び出し、トーマスとぼくの間のデッキに着地した。「ついてきて」そう言うと、4本の手でびよんびよんと通路を進み始めた。

トーマスはぼくの両手に布袋を押し付け、「弁当だ」と言った。

ぼくはそれを命綱であるかのようにしっかりと抱えた。クォーターでの重さより3倍重く、その重さが絶望の塊になって胸をふさいだ。いつもの朝ならぼくがトーマスの弁当を用意するのに、今朝はそんなことはすっかり忘れていた。いつもの朝はもう過去のものになってしまった。

「じゃあ、しっかり働いて、レニーの言うとおりにするんだぞ」トーマスは言った。

「ここでもらえる金がどれだけ大事かわかってるな」

「うん」ぼくはトーマスに背を向けて女の方へ歩き始めた。

「それから自分の立場を忘れるな」トーマスはわざと女にも聞こえるような声で言った。

「お前の体は建造主様のものだ。やつらのものじゃない」

「セラ」ぼくは言った。

トーマスはため息をついた。「セラ、息子よ。では行け」

レニーは少し先の連結部でじれったそうに待っていた。ぼくは父から置き去りにされる悲しみをかみしめながら、レニーの後を追った。

#

基本6機械は単なる機械ではない。120年前に建造主様に直接拝謁した開祖、大職長テトスは、6機械は建造主様の6つの相を表し、よって建造主様に近づく道となるものである、と説いた。6機械は、同族信仰集団の単位である分区の名前にもなっている。トーマスとぼくのように〈斜面〉分区に属していても、6機械それぞれをすべて等しく尊ばねばならず、ぼくはいま〈くさび〉のことで悩んでいた。

マニュアルの教えによると、〈くさび〉には分断と連結の両方の役割があるという。ここから学ぶべきことは、斧で薪を割るように自分を世の悪から切り離し、常に建造主様の側に身を置くことである。また同時に、アーチの中央を固定するくさび石——くさびの先端を切断した形の石——のように、間隙をつなぐことも学ばねばならない。

この教えが示すものは、世のために尽くし、模範となり、それでいて世の悪に染まらずにいななければならないということだ。

ぼくたち機械信徒は、世の悪から身を切り離すのは得意だ。だが、間隙をつなぐことはそれほど得意ではない——それを得意とするのはたぶんトーマスぐらいだろう。けれども、ぼくとトーマスの間には大きな〈くさび〉があり、二人のどちらがどちら側にいるのか、ぼくにはよくわからなかった。

#

荷役とはどういう仕事なのか、トーマスは何も説明してくれなかった。ここに来てようやく、船荷の積み下ろしだとわかった。ネザービュー・ステーションのハブのドックには、何百光年もの航路を経てきた宇宙船がやってくる。それらの船は大きさと重量に応じて、同心円上の3つのレベルにあるいずれかのバースに係留される。多くの船ではロボットやワールドによる自動積み下ろしが行われるが、その機能のない（あるいは必要のない）船が荷役人を雇う。

こうした内容をもっと表現豊かに説明しながら、レニーはぼくをロッカールームに連れてきた。ここでドックスーツに着替えるように、と言ってレニーは出て行った。赤いポリマーでできたドックスーツは、体にぴったり張り付き、首から下全部を覆うものだった。どれだけの革新素材を自分が身に着けているのか、なるべく考えないようにした。指紋認識ロッカーに入れたカバーオールと帽子がへびの抜け殻のようだ。この重苦しい気持ちは重力のせいではないものの、クォーターを出てからの厳しい肉体運動で実際に息も苦しい。弁当袋を持ってロッカールームから出ると、今日から上司となるレニーが待っていた。

仕事仲間の待つバースへ行く前に、レニーは下半身の方の両腕で立ち上がり、緑色の丸いバッジをぼくの胸に付けた。「規則なの」レニーは言った。「あんたには内蔵モニターが埋め込まれていないから、これで監視させてもらうのよ」

同じシフトの班は男女合わせて12人、ぼくを入れて13人だった。彼らはバースC-46のそばの小さな休憩室に集まっていた。レニーはテーブルの上によじ登り、手を振ってみんなを静かにさせた。「新しい見習いの子よ」レニーは告げた。「名前はジェード・プレーン。コーギー、今日あんたの組に入れてやって」

ソファにだらしなく座っていた超自然的に細い男がうめき声をあげると、ほかの者たちが一斉に笑い、ぼくはまた気が重くなった。恥ずかしいくらい汗が出る。

「さあさあ、あんたたち。ニードルスレッダー号がドックに着いてるよ。仕事開始」

皆ヘルメットをかぶり、レニーとぼくが入ってきたのと反対側のハッチから飛び出して行った。外の棚から仕事用具をつかむと、上下左右へ散って行く。全員、形は人間で、

一見ふつうだ。ぼくよりさほど年上には見えないが、生体改竄者の年齢は外見ではわからない。ドックスーツから出ている首から上の肌が鮮やかな青色で、ドックスーツの赤と派手なコントラストをなしている者もいた。彼はハッチから出るとき、ぼくにウインクした。ぼくはみぞおちがぎゅっと締め付けられる気がした。

レニーはテーブルから飛び下り、コーギーがぼくに話しかけるより先に彼の脚をつかんだ。「この子の面倒をよく見てやって」レニーは言った。「この子は未改造なの。  
フィッシュボウル  
金魚鉢を使わなきゃならないのよ」

「嘘だろ」コーギーは言った。「金魚鉢なんて見たこともないよ」

「今日はほかの装具と一緒に棚に置いてあるから」

コーギーはやれやれといったため息をついた。「それじゃ、ジューク」ぼくに向かって言う。「おれにぴったりついてこい。離れるなよ」

「ジュードです」ぼくは言った。

「わかったよ、ジューク」

レニーが手を伸ばして、ぼくの弁当袋を取った。ぼくはそれをまだ不安気に持っていたのだ。レニーは弁当袋をしまい、ぼくはコーギーについてハッチの外へ出た。

すると突然、ぼくは軽くなった。いや重さがなくなって、浮いた。

バース内は Fo 重力がオフになっているわけではない。オンではあるが、ゼロに設定されており、回転速度と遠心力のわずかな慣性効果をも相殺するように制御されていた。コーギーは、無重力空間を動き回るためのドックワンドの使い方を手短かに教えてくれた。ドックワンドとは、革新技术で作られた長さ1メートルぐらいの細い棒で、コマンドに応じてそのどちらかの端から不活性粒子が噴出される。ドックワンドをある方向へ向け、ぎゅっと握ると、反対方向へ進むことができる。こつをつかむまで少しかかったが、それも最初は触るのがいやだったからで、慣れてくるとコーギーたちがドックワンドのほかの機能を使って仕事をするのを手伝えるようになった。宇宙船の貨物倉から何が入っているかわからない大きなグレーのクレートを運び出し、空中を移動させて次の搬送先へ向かうエレベーターに載せる。搬送先はステーション内の別のレベルのときもあれば、別のバースに停泊中の別の宇宙船のときもあった。

ぼくは仕事ずっとフィッシュボウル金魚鉢をかぶっていた。顔の前に透明なバイザーが付いたヘルメットだ。このヘルメットから空中に文字や図が描き出され、ぼくがそのとき見ている物に重なって表示される。これによって、現在時刻、次に運ぶクレートの行き先などのデータがわかるというわけだ。頭の向きを変えてどこかに視線を合わせると、見ている物についての情報が表示された。たとえば、流線型の、ほとんど有機的ともいえる曲線を持つ巨大な宇宙船に目をやると、その船の航行スケジュール、乗組員情報、積荷一覧、製造元の明細などが表示された。船の全体図も表示されるので、黒い船体とバースの隔壁の間を自分で飛び回って眺めるよりも、ずっと詳しいことがわかる。前や後ろのハッ

チで作業している仕事仲間をズーム表示して、彼らに関する情報を見ることもできた。のぞき見のようで気がとがめたが、名前を覚えるには役立ち、おかげで最初の休憩に入るまでに全員の名前を把握していた。

この人たちは毎日毎日、寝ているとき以外はずっとこんな世界を見ているのか？ 目に入るすべての物の詳しい情報を瞬時に与えられながら？ ぼくも彼らも宇宙の同じ大きな輪の中で暮らしているとはいえ、この人たちの世界はまったくの異界で、こんなところはまっぴらだとぼくは思った。建造主様もご存知のとおり、ぼくはモーター製造があまり好きじゃないし、得意でもない。それでも、こんなところにいるくらいならニックやマルと一緒に機械学の授業を受けている方がよかった。トーマスと二人で家にいる方がまだいい。こんなに無知で冒涇的な世界に放り込まれ、建造主様を侮辱する道具を振り回し、生体改竄者たちの世界観に徐々に毒されていくくらいなら、ほかのどんなところだってましに思えた。

トーマスはとうとうつもりなのか。

仕事が終わるまで、とてつもなく長く感じた。視界の端でひっそりと時を刻む時計も助けにはならなかった。

#

勤務時間が終わり、ぼくたちは使い尽くして短くなったドックワンドを休憩室の外の棚に片付け、シャワーを浴びるために一列に並んだ。フィッシュボウルを脱げるのもうれしい。けれど、重力が戻り、データ表示が見えなくなると、なんだか夢の中で歩いている感じになり、フィッシュボウルなしで動くことに体を慣らすのはしんどかった。高重力の中をひとりで歩くのも、もちろんきつい。自分がこんなにも疲れていたとは驚きだった。体中の筋肉を使い果たしたみたいだ。

ロッカールームに着いても一列に並んだままなので唾然とした。男も女も同じハッチから中に入って行く。列の最後尾に並びながら、きっと中は壁で仕切られているか、少なくとも仕切りのカーテンくらいはあるんだろうと思ったかったが、朝この部屋で着替えたのだから、そんなものがないことはわかりきっていた。なんとか目をそらそうとしたけれど、自分のロッカーを開けるにはスーンという名前の女性の横を通らねばならず、彼女は既にドックスーツを腰まで脱いでいた。

ロッカールームはとても狭く、皆、押し合いへし合いしながら超音波シャワーへ向かう。ぼくは自分のロッカーの前で顔を赤くして、ロッカールームから誰もいなくなっただけから着替えるわけにいかないだろうかと考えていた。スーンの裸の胸が脳裏に焼きついている。彼女の胸に魅せられもう一度見たいと思っている自分と、そんな自分に愕然としている自分がいた。遠い母の思い出が、本当にあったとはもう思えないほどはるか昔

の思い出が蘇ってきたことにも愕然とした。

レニーがロッカールームにばたばたとやってきて、ぼくの腿を後ろからたたいて言った。「次のシフトの班が入ってくるんだから、急いでちょうだい」

ぼくはどうにかスーツを脱ぎ、それを回収ケースに入れると、シャワーの方へのろのろと向かった。人で込み合った白いセラミックのシャワー室に入ると鳥肌が立った。もちろん、超音波の振動で体から汗とほこりが払い落とされるせいでもある。中に入ってもぼくはまだほかの人の足首より上を見ることができなかった。問題はほかの人の裸だけではなかった。異教徒の前でカバーオールを脱ぐこと、それは建造主様に対する重い罪だ。ぼくは両手で股間の前を覆った。

例の痩せた青い男と尻がぶつかった。ぼくは飛び上がりそうになり、口ごもりながら謝った。「気にしないで」相手はやさしく微笑んで言った。「ここではみんな仲間なんだから」

「そうさ」コーギーが言った。「その辺の物は何でも自由につかんでいいんだぜ」

「指でつまんでもね」アイス・ナインという名の見るからに中性の者が、コーギーのだらけたペニスを指して言う。

「よせよ。おれの怪物を起こす気か？」

すると、たくましい背中に節くれだったこぶがいくつも付いているミークという男が言った。「おれが起こしてやる。誰かがおれのローションを使い切っちゃったんだ」

「あら、取り返したいって言ってるみたいね」スーンがくすくす笑って言う。

コーギーが口元をぬぐった。「そら、ここから持っていけ」そう言うと、コーギーのペニスが異常に大きくなり、そそり立って震えた。それはまさに怪物だった。

ぼくは目をそむけ、赤くなった。ところが、不思議なことが起こり始めた。相変わらず居心地は悪かったが、なんだか自分が透明になって誰からも見えなくなったような気がしてきた。ジムの洗浄室にいるときほどには、逃げ出して隠れたい衝動はない。ぼくは見回すことができるようになり、男の裸も女の裸も、どちらともつかない2、3人の裸も、明らかに中性のアイス・ナインの裸も見ることができた。クォーターでは、男女の接触は、たとえ交際期間であっても厳しく制限され監視されていた。いまのような状況は、モーターが原鋳から勝手に出来上がるのと同じくらい考えられないことだった。どうしたらいいかはわからないまでも、数分前までは謎でしかなかったことがいまはいろいろわかる気がした。

シャワーが終わらなければいいのにとすら思いかけて、はっと我に返った。ぼくは早くも破壊者の魔の手にかかりかけている。クォーターにいたときと比べて、ここでは何と気ままに破壊者がのさばっていることだろう。絶望の波がぼくの胸に打ち寄せる。これをどうやって切り抜ければいいのか。

汚れは落ちたものの、裸の肌に恥の膜を張り付かせたまま、ぼくはみんなの後からロ

ッカーへ戻った。アンダーオールとカバーオールを身に着け、帽子をかぶろうとしたところで、背の高い、まだズボンをはいていないトゥエンティという男がぼくの手から帽子をひったくった。

「これ何だい？ 制服か何かか？」彼は帽子をひっくり返しながらかいた。「ほかの仕事もしてるのか？」

ぼくはこぶしを握りしめた。抑えていたものが一気にあふれそうになる。透明でいられたのももうここまでだ。もうレニーもない。頼れる人はどこにもいなかった。トゥエンティの生体改竄された手がぼくの帽子を汚すのを見て、ぼくのむき出しの頭から怒りと屈辱が噴き出す。

「やめろよ、ばか」コーギーが帽子を奪い取りながら言った。「こいつは輪住族なんだから。知らねえのか」

それからコーギーは帽子をほかの者に渡し、その相手は“輪”住族ならこの三角形は何だと質問し、次にまた別の者に帽子が渡り、それから帽子はぼくを越えて投げられ、また反対側へ投げ返された。ぼくは取り返そうと手を伸ばしたが、背骨にこぶのあるミークに取られてしまった。

「輪住族だって？」彼は言った。「キリスト教徒みたいなもんだらう？ なんだって裏切り者の名前を名乗ってるんだ？ 輪住族さんよ」

「建造主様を裏切ったのはユダだ」ぼくは低い声で言った。威嚇するような声を出そうとしたのに、自分でも声が震えているのがわかる。「ジュードは別の使徒だ」

「ジュード、ユダ、ペテロ、ペニス、何でもいいさ。これ、おれの頭に合うかな」

ミークが帽子をかぶろうとし、ぼくが何か叫びそうに、後で悔やむことをやりそうになったそのとき、ベネフィセント・サンライズという名前の半裸の女性がミークから帽子を取り上げた。

「ミーク、これは伸び縮みしないのよ。昔の素材だからあんたのでかい頭は入らないわ」

「そんな素材、何の役に立つんだよ？」

ベネフィセント・サンライズは、帽子をひっくり返した。斜面のマークを調べている。「原始的な生地ですらできた物を初めて見たわ。おもしろい感触ね。本物みたい」

彼女の率直な好奇心がぼくの怒りを和らげた。それとも大きな揺れる胸のせいだろうか。その大きな胸を見て、ぼくの中に何かよくわからない感情がこみ上げてきた。欲望ではない。違う。だけど、何か刺すような激しい感情。あれに触ったらどんな感じだろう。

青い肌の男が手際よく彼女から帽子を取り上げた。つばのところだけを持って、ぼくの手へ渡してくれる。ぼくは夢中で帽子をつかんだ。

「本物みたいなのは、あんたのおっぱいだよ、サニー」彼はベネフィセント・サンライ

ズに言った。

「大きなお世話よ」みんなに笑われながら彼女はそう言い返したが、笑顔だった。

ぼくは屈辱と安堵で力なく帽子を頭にかぶり、みんなに背を向けて何も入っていないロッカーを探るふりをした。その周りで、みんなはさりげなく服を着ていった。

#

青い肌の男の名はハウン・フリードリヒ四世といい、フィッシュボウルで見た情報によると、デレク・スペクターという名前に変えようとしていた。いまは正式な改名までの試用期間中らしい。

自分の名前を自分で選んでもよいという考えは、生体改竄者のほかの点と同様、ぼくには奇怪なことだった。もし自分で決められるとしたら、ぼくは自分に何という名前を付けるだろう。ポール？ ルーク？ ティモシー？ どれもぴんどこない。ジュード以外の名前と呼ばれて返事をする事なんて想像できなかった。ぼくはジュードだ。ジュードであることがぼくであることだ。

ぼくはロッカールームの外の通路に立ち尽くしていた。ロッカールームでぐずぐずしていたら、次の班が来て外に追い出されたのだ。右からも左からも通行人が来て、ぼくをよけて通り過ぎる。今朝どの方向から来たのか、パニックと戦いながら思い出そうとしていると、ハウン——デレク——が青い手でぼくの肩をたたいた。

「どっちへ行けばいいかわかるかい？」明るい笑顔でデレクが聞いてくる。

「えーと……外縁側へ」答えるうちに顔が熱くなる。

「なるほど、そりゃそうだろうな」デレクはぼくの隣のちょっと近すぎると思うところで隔壁に寄りかかった。腕を組み、涼しげな目をしている。彼の肌はエノクの伝説の海のように青く、瞳はその空のかけらのように光っていた。「帰り方がわからないのかい？」

ぼくは下を向き、グレーの安全靴を見つめながら答えた。「そうみたい」この見るからに異常な生き物にさっきも助けられたばかりなのに、ここでまた助けてもらうのは、ばつが悪い。

デレクはあごに手をやって向かい側の隔壁を見つめた。「輪住族の居住区か」そう言ってちらりとぼくを見た。しまった、というより、悪かった、という目だ。「いや、マシーニスト・クォーターか」

「あ、うん。そう」

彼は遠くを見るように目を細めた。「地図を見てみよう」

「どの地図を？」ぼくは聞いた。すると今度はちょっととがめるような顔をされ、ぼくはあわてて「ああ、そうか」と小さく言った。

「エレベーター7か8か9に行けばいいようだ」しばらくしてデレクは言った。「そっちへ行く道はかなり複雑なんだ。ぼくもちょうど同じ方向だから、よかったら一緒に行こうか」

ぼくは逃げ出したくなかった。行き方だけ教えてもらってひとりで行きたかったが、疲れていて逆らう気力もない。ぼくは力なくうなずいた。

狭い通路を歩き始め、デレクが前を歩きながら言った。「今日はよくがんばったな。あんなにすぐに無重力に慣れるやつはめずらしいよ。あのレニーですら感心したと思わず」

デレクはぼくが何か言うかと振り向いたが、ぼくは何と言えればいいのかわからず黙っていた。

「コーギーのやつ、君に偉そうな態度を取ったんだろうな」デレクは言った。「だけど、やつだって新米のときは右も左もわからなかったんだぜ。見せたかったよ。オーバーレイを使ったのは初めてかい？」

「うん」

「ぼくも自分がオーバーレイを初めて使ったころのことを思い出すよ。あれをオフにして、どこを見てもラベルが表示されないと変な感じがした。君も同じことを経験するだろう。きっとまだジェフも使ったことがないんだろうな」ぼくがぼかんとしていると、彼はにこっとした。「うん、ジェフの使い方も教えてやらないとな。そうすれば、今度どこかへ行くとき、ぼくのおしゃべりに付き合わなくて済む」

「ジェフって？」ぼくは聞いた。

「パブリックネット上の情報デーモンだ。君たちはほんとに何も知らされずに暮らしているんだな。ジェフは、主に旅行者とか短期滞在者とか、つまりオフラインの人のためにあるんだ。だから君も使うといい。ジェフはどんな質問にも答えてくれる。ジェフが答えを知っていて、質問者が11歳以上ならね。それと、プライベートな質問や機密情報でさえなければ」

デレクは大事なことを教えているという顔で何度もぼくを振り返ったが、ぼくにはさっぱりわからなかった。自分が間抜けになった気がする。それに「デーモン」という言葉を聞いてからずっと鳥肌が立っていた。「ぼく、いや、ありがとう、だけど、ぼくにはあまり関係ないと思う」

デレクはもう一度ぼくを見ると肩をすくめた。「好きにすればいいさ。でも、君には知りたいことを知る権利がある。ただ、質問するだけでいいんだよ」

それから角を2回曲がるまで、ぼくたちは黙ったまま歩いた。ぼくは何か正体のわからない不安に包まれていた。

「それで、君みたいな善良な機械信徒マシーニストがどうしてこんなところで働くことになったんだい？」デレクがようやく口を開いた。「君たちは自分たちの区画を出ず、野蛮な民の中

に混じったりしないはずじゃなかったのか？」

ぼくたちはもう広い通路に出ていて、通行人も増えていた。ぼくの横に並んで歩くデレクがあまり大きな声でしゃべるので、周りの目が気になる。「生体改竄者との商取引は禁じられていない」ぼくは声を抑えて少し遠慮がちに言った。「そりゃ……、好ましくはないだろうけど。信仰の危険にさらされるから」

「信仰の危険になれば光栄だ」デレクは言った。「ぼくと口をきくのだっていけないことなんだろう？」

「それは……」ぼくはデレクから目をそらして辺りを見回した。周りは、罪深い体、罪深い顔、罪深い音、罪深いにおいだらけだ。「実はそうなんだ。こんなふうになっているのは」

「じゃあ、何で？ いや、広い意味で。そもそもどうしてここで働くことになったんだい？」

ぼくはため息をついた。「しかたがなかったんだ」黙ってられない自分を呪いながら言った。「ぼくの父は分区の輸出商で、分区で製造した物を外で売る仕事をしている。ギルドに対する分区の義務を果たすために」

「ネザービュー・ステーションを出て、伝説的なエノクへの旅を続ける資金を貯めるためだね。本で読んだことがある」

ぼくは驚いてデレクを見た。ぼくたちは生体改竄者たちのことをほとんど何も知らないのに、生体改竄者のデレクがぼくたち機械信徒のことを知っているなんて。「でも商売はあまりうまくいっていない」ぼくは続けた。「父は立場上、売り上げから分区の分を引いた残りしかもらえない。だけど、近頃ではその残りもあまりなくなってしまった。実際、父の分なんてまったく残らないんだと思う。父は何ヶ月もかかって、クォーターの外でのぼくの働き口を見つけたんだ。嘘じゃない、それくらい厳しい状況なんだよ」

「そりゃそうだろう」デレクは言った。「原始的な材料でできた原始的なおもちゃなんて誰もほしがらないからな」

「おもちゃなんかじゃない！」ぼくはデレクの方を向いて叫んだ。何週間も前から組み立てているモーターのことが頭に浮かぶ。「厳粛な、神聖なものだ！」

「わかった、わかった。ぼくが悪かったよ」ぼくたちはエレベーター室でエレベーターを待っているところだった。デレクはぼくの怒りをさえぎるように両手を挙げた。そのとき初めて、彼の手ひらと指の腹が濃い緑色で青い部分との境目がぼやけているのが見えた。「そういうつもりで言ったんじゃないんだ。だけど、君たちのやっていることが、たいいていの人からどう見られているか知ってた方がいいぜ。実用的な使い道がなければ、それはおもちゃなんだ」

「実用的な使い道はあるよ」ぼくは言った。「あんたたちは、傲慢すぎるから謙虚になれず、それを認めることもできないんだ」

デレクはうなずいた。「つまり、ぼくたちが子供らしいものを捨ててしまったと言いたいんだろな」

マニュアルのことをそんなふうに言われてぼくは絶句した。言い返そうと言葉を探しているうちにエレベーターが開き、ぼくたちはほかの乗客たちと一緒に乗り込んだ。その中の一人の女は指の代わりに触手が付いている。乗っている間、デレクはまっすぐ前を見て、口元に笑みを浮かべていた。

エレベーターがレベル6で開いたとき、ぼくはまだ腹を立てていた。ここからは自分ひとりで行けると言おうとしたが、デレクはもうぼくと一緒に降りていた。そこは、じっとり湿った空気と生い茂る草木の中だった。

「聞いたかったんだけど」デレクは言った。「君の服に付いている三角形は何を表しているんだい？ それは斜面だよな？」

「ああ、うん」ぼくは答えた。「ぼくは〈斜面〉分区に属しているから」

「〈ねじ〉じゃなくてよかったな」デレクは言った。「〈ねじ〉だったら仕事は永遠に終わらない」

「それじゃ、君は」反回転方向の歩道へ足を踏み出し、ぼくはよろめいた。「〈斜面〉が基本6機械の1つだと知っているんだね？」

「どこかでそんな話を聞いたことがある」デレクは言った。

「6機械には象徴的な意味もあるんだ。その中で〈斜面〉は偉大なる建造主様へ近づく傾斜を表している。どんなに――」

「つまり、神へってこと？」

「そう呼んでもいい」ぼくは言った。

「そう呼んでもいい……。なら、そう呼ばないでもいいわけだ」

デレクはさっきからぼくの話をもぜっかえしてばかりで、ぼくはすっかり頭に来た。「どんなに傾斜がゆるくても」ぼくは意地になって続けた。「〈斜面〉はぼくたちを上へ上へと導いてくれる。たとえ何十億年かかろうが、ぼくたちはいずれ建造主様の高みまで到達するんだ」

「なんだかバベルの塔みたいだな」デレクは言った。「バビロンの民たちも、同じように神に近づこうとして神から罰せられたんじゃないか？」

「彼らのやり方はずっと直接的で、文字どおり近づこうとしていたんだ」つい口調が強くなる。「ぼくたちは文字どおりの意味で近づこうとしているんじゃない。比喩的な意味で近づこうとしているんだ。建造主様の6つの相を理解して動かすことでぼくたちは建造主様に近づく」

「神の方では、直接的に近づかれる方がいいんじゃないかと思うけど？ 巨大な杭に斜面を巻きつけて天へ昇ろうとするとか」デレクはぼくの方を見て青い眉毛を上げた。目が光る。「神が怒ったのは、そこに比喩的な意味があったからじゃないかな。バビロン

の民が神だって完全じゃないと考えたから、それで神は彼らを罰したのかもしれない」

そんな罰当たりなことをデレクがおもしろそうに言うのを聞いて、ぼくは息が止まりそうになった。「建造主様には比喩的にしか近づいちゃいけないんだ！」ぼくは叫んだ。

「じゃあ、君たちはどうして文字どおりの決まりに縛られているんだ？ どれでもいいような6つの機械からしか物を作っちゃいけないなんて決まりに縛られているんだ？」

「どれでもよくなんかない！ 6機械は建造主様の6つの相なんだ」

「どれでもいいさ。基本とはいえないような機械もあるじゃないか。たとえば、さっきのねじ。ねじはさっき言ったみたいに軸の周りに斜面を巻きつけたようなものだ。滑車は輪軸の変形だし、くさびは斜面を別の方向から見ただけだ」

ぼくはぐったりして額の汗をぬぐった。デレクが言うことは、まさにぼく自身が抱いたことのある冒険的な考えと気味が悪いほどそっくりだった。ぼくが激しく反論しているのはそのせいかもしれない。「どんな相も、別の相とある程度共通するところがあるんだ」ぼくはそう言ったが、確信より感情が先走っていた。

「もし本当に神がいるんだったら、神のなすことについてもっと深く掘り下げれば、君たちの言う6つの機械よりずっと役に立つ比喩が見つかりそうな気がするけど」

デレクが歩道を降りたので、ぼくも続いて降りた。そこでようやく、PMゲートの近くまで来ていることに気付いた。ほっとしつつも悔しいことには、ぼくはそれまで会話に気をとられて、周りの悪夢のような人々も、生い茂る草木もほとんど目に入っていなかった。それらに気付いた途端、急に取り囲まれたような気分になる。

「ぼくたちはこれ以上深く掘り下げつもりはない」人込みをすいすい進むデレクに追いつこうと急ぎながら、ぼくは言い返した。

「それじゃあ、神の域に近づくことなんてできやしないだろう？」デレクはマシーニスト・クォーターへの質素なゲートの前で立ち止まった。「さあ、着いたぞ」

汗だくの顔でぼくは唇を噛んだ。「ありがとう……その、ここまで案内してくれて」

「どういたしまして」デレクは行きかけて振り返った。「そうだ、言い忘れるところだったけど、ロッカールームでのこと、君はあいつらの悪ふざけをよく我慢したと思うよ。相手にしないでいれば、あいつらもすぐにかまわなくなるさ。悪いやつらじゃないんだ。ただ、ぼくに言わせれば向学心のない無知蒙昧の典型だってだけでね。特にそうしようとしなくたって、あいつらも新しい物にすぐ慣れる」

「イスラエルの民と火のへびのように」ぼくは言った。

デレクはまばたきし、遠くを見るような目をした。「それはおもしろい」しばらくしてからデレクは言った。「民数記、第21章か。へびに噛まれた者は、モーセが造った青銅のへびを見れば生き延びた。ただ見るだけで助かった。その本にはいろいろなことが書いてあるな」

「奇跡は」ぼくは言った。「異教徒ですら見てわかるものなんだ」

デレクはしばらく大笑いした。それを見てぼくは自分が賢くなったようで誇らしかったが、こんな人間もどきになんだって自分を賢く見せる必要があるだろう。「一本とられたよ、ジュード」デレクは言った。「じゃあ、また明日」

デレクはぼくには見えない何かを読んでいたが、それから去った。痩せた青い体がごちゃごちゃした異様なジャングルに溶け込んで消えた。デレクはこの物理的な世界よりさらに異様な世界の住人なのだとすることをぼくは思い出した。同じ物を見ても、デレクとぼくとではまったく違う物が見えるのだ。

「セラ、デレク」ぼくは小さい声で言った。レバーを引いてゲートをくぐりながら、デレクがぼくを見ているとき、何が見えるのだろうと思った。

#

清潔で平穏で涼しく静かなクォーターは、いままでいたところとはまったく対照的だった。ぼくたちの時計では夕方だった。ここでは勤務時間は1種類しかない。通りがかりの数人が、ぼくが外から入ってくるのを見て変な顔をした。気分はよくなるはずだった。永遠に続くかと思われた労働を終えて家路につき、余計な重力から解放され、軽くなり、汗も引いた。けれど、〈輪軸〉分区との境界近くまで来ても、ぼくは気が高ぶったままで落ち着かなかった。トーマスがぼくの帰りを待っているのはわかっている。今日の首尾を聞きたがっているに違いない。でも、まだ家に帰る気になれなかった。ぼくは下を向いたまま、ジムの方へ歩き始めた。

ジムのほとんどの機械は〈てこ〉分区の人たちが使っていた。全員ぼくより年長だ。それでもあまり待たないうちに1つが空いた。ぼくは全力で修練をきちんとやり遂げようと思った。あらゆる筋肉を滑車に集中し、建造主様の掟を心の中で唱える。ところが、第1篇に入るや否や、筋肉が痛んで震えた。その上、ぼくは気持ちを集中できなかつた。何度も何度も厄介な裸の映像が頭をよぎった。ふつうの色の裸だったり、青や緑の裸だったりした。

〈てこ〉分区の人たちは一人、また一人と修練を済ませ、洗浄室へ向かう。ぼくの方を見てささやき合う人もいた。外で生体改竄者たちがぼくを見たのと同じような変な目でこっちを見ている。〈斜面〉分区の人たちが増える前に急いで必要最小限の修練を済ませようと思ったが、無駄だった。まだ終わらないうちに、ニコデマスと、やはり〈斜面〉分区のアモスがやってきた。部屋の向こう側にいる彼らの姿が、3段の機械ごしに見える。ぼくは頭をかがめたが遅かった。ニックはぼくを見つけ、急いでこちらへやってきた。

ぼくの隣の機械がちょうど空いたところだった。ニックはぎごちなく親しげな表情を浮かべて、隣に滑り込んだ。ひとり残されたアモスは前の通路で落ち着かない様子だっ

た。「セラ、ジュード」ニックが言った。

「セラ」ぼくは答えた。口が乾く。

ニックは両腕と背中を伸ばす準備運動を始めた。「今日学校に来なかったね」ニックは言った。

ぼくはまっすぐ前を見たまま、ふいごモードで腕を動かしていたが、アモスが前に突っ立ってぼくを見ているので、視線を膝に落とした。「うん」

「マラカイが聞いてきた噂だと、君は外に行っていたって」ニックが言った。

「そう、ハブにいたって」アモスが言った。

「マラカイは君が仕事をしているって言ってた」

ニックの声には不安そうな期待がこめられていたが、それが噂の真相を確かめたいということなのか、それとも単にぼくと話したいということなのか、よくわからなかった。いずれにしても、ぼくはニックの顔を見ることができなかった。ニックの金色の髪も、光る肩も、賢そうな青い目も見ることができなかった。でも何も答えずにはいられない。

「そのとおりさ」ぼくは無造作に言った。「もう学校ではあまり会えないと思う」

「生体改竄者たちの話は本当かい？」アモスが言った。アモスは痩せていて、びよんびよん踊るようにして話す。「あいつらは水の代わりに血を飲むんだって？」

「アモス、向こうの機械が空いてるよ」ニックがあごで指す。

「だけど――」

「ぼくはもうすぐ終わる」ぼくは言った。

「急いだ方がいいよ、アモス」

ニックの顔は見えなくても、その声に警告が混じっているのは聞き取れた。アモスの顔に不満気な表情が浮かぶ。アモスは大股で向こうへ歩いていき、ぼくは胸に暖かい気持ち広がるのを抑えようとした。

ぼくは何も言わずに 20 数える間休み、次のふいご運動に取り掛かった。

ニックは牽引車を動かし始めた。「それで、どういうことなんだい、ジュード？」ニックは反復の合間に聞いてきた。

「何が？」

「もう 2 週間もぼくを避けているだろう。ぼく、何かした？」

ぼくはため息をついた。握りを両手でつかみ、上半身全体でぶらさがるようにする。

「君が何かしたわけじゃないよ、ニック」

「じゃあ、どういうことなんだ？ その仕事が原因なのかい？」

何と答えればいいんだろう？ ニックのことを好きになりすぎそうだからと？ そんなことは、たとえ心の中でも言えない。

「あんな仕事なんか関係ないよ」そう言いながらも、今日見たことやしたことをニックに全部話してしまいたかった。頭に血がのぼり、ぼくは修練を中断して立ち上がった。

「ニック、君は、君は、——いや、何でもない！」

ぼくは洗浄室へ駆け込んだ。周りの視線が気になり、できるだけ何気なくふるまおうとしたが、あまりうまくいかなかった。逃げ出す前に一瞬目に入ったニックの顔は、傷つき心配そうだった。ニックはまだ汗もかいていなかった。

湯気が満ちたシャワーの中を歩き回る〈てこ〉分区の人々の間で、ぼくはニックのことを頭から追い出そうとした。ハブのシャワーで感じたように、自分が透明になる幻想を呼び起こそうとした。生体改竄者の仕事仲間の中に溶け込み、自分が誰からも見えていないと思い込めたときのように。いまここにいることが間違っているような不安を感じる。まるでここが自分の居場所ではないみたいだった。けれど、ぼくの居場所は絶対にあちら側ではない。

洗浄もそこそこに、ぼくはすばやく服を着るとメイン通路へ急いだ。ここにはいつもどおり多くの通行人がいたが、外と比べればずっとまばらに見えた。勤めを終えて足取り軽く自分の分区へ帰って行く老若男女。夕食の時間が近づいている。心配ごとのなさそうな彼らがうらやましかった。

「ジュード、ジュード」穏やかな声で呼ばれてぼくは顔を上げた。下を向いて歩いていたことに、そのとき気付いた。強い重力に引っ張られているわけでもないのに。

呼んだのはサリアだった。ぼくと同じ年で〈滑車〉分区の子だ。ぼくとは逆方向へ向かって歩いてきたところだった。「やあ。セラ」ぼくは言った。

サリアはぼくの袖を引いて通路の脇に引っ張った。「学校で会えなくて残念だったわ」サリアは小さい声で言った。男子と女子が同じ授業を受けることはないが、昼食時には顔を合わせる。女子が習うような単純な技術を、男が組み立てた機械で粗い布を作ったりするようなことをぼくも習いたいとよく思ったものだったが、トーマスにその願望を話したときのことは忘れられない。そのころのぼくはまだ幼くて、何もわかっていなかった。

「今日は学校に行かなかったんだ」ぼくは疲れた声で言った。

「知ってるわ」サリアは恐ろしいといった顔をした。「外へ行っていたんでしょ？ 今朝あなたが出て行くのをヘレナが見ていたの。それでどうだった？」

ぼくはもう逃げ出したくなって通路の先に目をやった。今日どうだったかなんてどう説明できる？ 混乱していてそれどころじゃない。「まさに破壊者の巣窟だったよ」そう言って立ち去ろうとした。「ねえ、悪いけど、ぼくもう家に帰らなきゃ」

サリアはひんやりする手をぼくの腕にかけた。サリアは人もうらやむ長くて黄色い髪をした美少女で、背丈もぼくと同じくらいあった。「ジュード、どうかしたの？」サリアは心配そうな目でぼくの顔をのぞき込んだ。「そんなにひどいところだったの？ わたしには話していいのよ」

ぼくは涙が出そうになった。ぼくには何人も友だちがいる。あるいは友だちがいたけ

れど、何でも打ち明けられる相手はいなかった。本当に信頼できて、心を許せる友達は一人もいない。ぼくにはそういう友だちが必要だった。

「サリア——」

サリアがぼくの顔を見つめているのはわかっているのに、ぼくは目を合わせることができない。「なあに？」サリアが聞いた。

「ぼく——」あのことをもう言ってしまうか？ サリアはいつもぼくに親切だった。ぼくはぱっと顔を上げた。「ニックのことどう思う？」

「ニコデマス？」サリアは美しい眉を少し寄せた。「いい人だと思うけど。どうして？」

ぼくは首を振った。胃がひっくりかえりそうだ。「つまり、その、ニックはとつてもすてきで……」

サリアの目が大きく見開かれるのを見てぼくの声はしりすぼみになった。「まあ」サリアは嘆息するように小さく言った。

「いや、ニックとはずっと前から親友だったし……」ぼくは言った。

サリアは何か考え込むように、ゆっくりとうなずいた。「ううん、いいのよ。わかっている」

「それじゃ、ぼくが言ってること……」

「思ってもみなかった」サリアの口元に悲しげな笑みがかすかに浮かんだ。サリアは突然ぼくの頬にキスした。「ありがとう、ジュード。ありがとう。じゃあ、またね」

そういうとサリアは通路を歩いて行った。クォーターGで黄色の髪が浮き上がる。残されたぼくは、いまこの宇宙でいったい何が起こったのだろうと、心細い気持ちで考えていた。

#

トーマスはキャビンでマニュアルを読みながらぼくを待っていた。ぼくが帰宅して後ろでハッチが開くと、あてつけがましくクロノメーターを見た。「遅かったな」トーマスは言った。

「帰る途中で修練に寄ったんだ」ぼくは言った。「後にすると疲れて行けなくなると思ってたから」

トーマスがわかったというようにうなずいたので、ぼくはほっと息をついた。「今日はどうだった？」トーマスが聞いた。

ぼくは肩をすくめた。「問題なかったと思う」

「ちゃんと働いたか？」

「そのつもりだよ」

「仕事仲間とはうまくやれたか？」

ぼくは帽子を脱いで頭をこすった。その話を全部トーマスに話す気にはなれなかった。

「うん。ぼくのことなんて、あまり気にしてなかった」

トーマスはマニュアルに指をはさんで閉じた。「ジュード、あいつらには礼儀正しくふるまえよ。だが、自分の考えは表に出すな。生体改竄者たちの中で信念を貫き通すにはそうするしかない」

「わかった」そうは言ったものの、もう嘘をついている気分だった。

ありがたいことに、その話はそれで終わりのようだった。ただ、マニュアルに戻る前に、トーマスは給料日がいつになるのかだけ知りたかった。それについてぼくはあまり考えていなかった。てっきり、トーマスがもうレニーと話を付けてあるものと思っていた。

ぼくは折りたたみ調理器で夕食の用意をした。ひき肉と豆と野菜のシチューだ。料理は修練より落ち着いて集中できた。けれど、その晩、眠りに落ちながら、ぼくの意識はロッカールームの女たちから、そしてぼくの頭から1メートルも離れていないところで床に固定されている木の衣装箱、カイヤの衣装箱から離れなかった。

#

〈ねじ〉は特殊な機械だ。〈輪軸〉、〈斜面〉、〈くさび〉の特性も併せ持ちながら、その役割を果たすために、たいていは〈てこ〉の作用も要する。結合と上昇の両方の役割があり、生命の火をともし男女の聖なる交わりの象徴でもある。

神聖なものであるとはいえ、ぼくにとって〈ねじ〉はいつもどこかしら決まり悪いもの、気がかりなものだった。自分の分区が〈ねじ〉だったらもっと理解できたかもしれない、もっと健全な受け止め方ができたかもしれないが、ぼくはどうしても〈ねじ〉の象徴的な意味になじめなかった。ぼくから見れば、〈ねじ〉の特性は、愛と昇華というより、対象となるあらゆる表面への暴力のように思えた。

〈ねじ〉を完全に信頼して崇拝できる日がくるとは、なかなか思えなかった。

#

ぼくの勤務サイクルは、7日間働いて3日間休むという周期になっていた。それで生体改竄者の暦のSウィークが一巡する。ぼくの最初の“週末”はギルドの暦では木曜日から土曜日にあたるから、仕事が休みの間は毎日学校へ行くことになる。ぼくが全然休みなしになることも学校の勉強が遅れることも、トーマスはたいして気にしていないようだったけれど、ぼくにはたいへんなことだった。思い切ってこの件を持ち出したら、

トーマスは、われわれが犠牲を払えば建造主様のご加護がある、と言った。だけど、トーマスはいったい何を犠牲にしているというんだ。

2巡目のSウィークが始まるころには、無重力にも慣れて自信がついてきた。フィッシュボウルのグラフィック・オーバーレイも、快適とは言えないまでも使いこなせるようになってきた。オーバーレイを見ると、本当は隠しておくべき、または少なくとも目をそらしておくべき現実が目の前にむき出しになっている気がする。それでも、仕事仲間と一緒にロッカールームにいるときと同じく、目をそらすわけにいかなかった。ほとんどの仕事仲間とは友人のように接したが、実際には誰一人として友人とは思えなかった。ぼくと彼らが友人になるには、世界観も友人の意味もあまりに違っていた。たとえば、彼らはシャワー中にときどき互いの体をつねったりしても平気なようだけれど、ぼくは平気じゃないし、彼らにもそれがわかってきた。

たいていの昼食時、それからときどき帰り道にもデレクとおしゃべりをした。デレクとぼくとは明らかに違っていたけれど、デレクは率直で好奇心があり、ぼくの話をはじめに聞こうとしてくれたから、彼のことが憎めなくなってきた。ただ、彼の言うことにうまく反論できないときもあった。そんなデレクのことを、ぼくは勉学に励むための刺激剤のように考えた。デレクの言いがかりは絶対に反論可能だとぼくは信じていたし、きっぱりと反論できないようでは、ぼくはギルドの代表者として失格だ。

Sウィーク2週目の七曜日、仕事が終わるとレニーがみんなを休憩室に集めた。「ステーキたち、ちょっと聞いて」レニーは4本の手で器用に側転して椅子からいつものテーブルへ登った。週末を前に活気に満ちていた室内は静かになった。

「来週の四曜日と五曜日に特殊業務があるの。バースA-11に科学標本を積んだ船が着く。船も積荷も慎重な取り扱いが必要よ。バースは完全に真空になるから危険業務手当が出るんだけど、応募条件として真空対応資格が必要。興味がなければ別にいい。ここでの仕事もたくさんあるんだから。ただ、いま真空対応資格がなくても応募する気があるなら、資格取得はいまからでも遅くはない。資格取得は勤務時間内に有給で受けられる。希望者は三曜日の朝までに証明書を見せること。わかった？　じゃ、以上」

みんながシャワー室へ行くとレニーがぼくを脇へ呼んだ。「これはいい機会よ」レニーは声を落として言った。「あんたはよく働いてる。3倍の給料がもらえるチャンスを見逃す手はないわ」

確かにいい機会だった。収入が増えて喜ぶトーマスの顔が目に浮かぶ。「真空対応資格を取るにはどうすればいいんですか」ぼくは聞いた。レニーの2つの銀色の目玉にぼくの姿が小さくゆがんで映っている。「試験か何かを受けるんですか」

「うーん、試験とかじゃなくてね」レニーは言った。「必要なのは、真空に耐えられるように肺と目と耳を強化することなの。もちろん、バースでは圧力服を着て作業するんだけど、万が一事故でもあると、救助して加圧する前に窒息してしまう危険がある。そ

の危険にさらすことは規則で禁じられているのよ」

ぼくは息を飲んだ。「それはつまり——生体改竄ってことですか」

「ほんのちょっとよ。内部的なね」

特別手当はほしかったけれど、断るしかなかった。「せっかくですが、ぼくには無理です。すみません」

レニーは下半身の肩を器用にすくめた。彼女の目に映ったぼくの姿がくによくにゃ踊るように動く。「謝らなくていいわ。あんたが決めることだし、断ったからって別に悪く思ったりしないわよ。だけど、いま決めてしまわないで。休みの間考えてみてよ。詳しいことはジェフに聞くといい。父親とも相談してみなさい」

「わかりました」ぼくは言った。「父が何とつかはわかってますけど」

「トーマスは輪住族にしてはいいやつよ。とにかく話してみて」

身が縮む思いでシャワーへ向かいながら、トーマスはぼくの中に破壊者がいると言うに違いないと思った。それでも、トーマスに話せと迫るレニーの勧めを頭から追い払うことができなかった。

#

その晩、粗末な夕食をとりながら、ぼくはよく考えもせずにこの件をつい口にしてしまった。「レニーが来週特殊業務があると言うんだ。特別手当が出る仕事で、ぼくにぜひやれと言うんだけど」

トーマスはフォークを置いた。「それで？」テーブルごしにぼくの方をにらんでいる。「それで……、小さな改造が必要なんだ。真空対応の強化が」

トーマスは下を向いた。今日はクォーター暦の土曜日で、ふつうならぼくは午前中だけ学校に行き、トーマスは朝の簡単な社会奉仕をする日のはずだった。けれど、ぼくたちはもういままでどおりの生活はできなかつたし、二人とも一日働いてすっかりくたびれていた。ぼくは食べるのをやめて、トーマスが何か言うのを待った。心臓が口から飛び出しそうだ。

何が正しい答えなのか知らないわけではなかった。建造主様が何とおっしゃるか、自問すればわかることだ。そして母なら何と言うかも。寝台と寝台の間の狭い空間に広げた折りたたみテーブルの下で、安全靴の先を木製の衣装箱にそっとあてる。衣装箱には母カイヤの服が入っていた。不用品の所持は規則違反だが、トーマスはそれをリサイクルに出せずにいた。まるで母が戻ってくるのを待っているかのように。ぼくは待つてはいなかった。カイヤについてのはっきりした記憶は数えるほどしかない。それに、母さんは天使様のところにいるとトーマスから繰り返し聞かされてきたから、ぼくの中で母はたいていいつも天使の姿をしていた。真っ白な服に包まれ大きな翼を背中につけた母

が、高い所からぼくを見守っている。ぼくが改造のことを口にしたら、母ならどう思うかわかっていた。そう、母がいまどう思っているかぼくにはわかる。建造主様の領内のどこかからぼくを見守りながら。

トーマスはゆでたじゃがいもと人参をフォークで口へ運ぶと、上目づかいにぼくの方を見た。また遠くを見ているような目だ。「彼女にいやだと言ったんだろうな？」

ぼくはちょっとたじろいだ。カイヤじゃなくてレニーの話だと気付くまで少しかかった。「当然だよ」どことなくぎこちない返事になり、なんだかトーマスから無理やり嘘を言わされたような気分になる。

「まったく、あの女め」トーマスはさらに食事を口へ運び、しばらく黙って食べていた。

トーマスが次に話し始めたとき、その目も声も思いがけず穏やかになっていた。「ジュード、教会では、この世界と妥協するなど教わる。建造主様のおそばにいるように生きろと。だが、現実にはそうもいかない。われわれは皆妥協する——そうしなきゃやっていけない。生き延びられない。厄介なのは——いや、難しいのは、妥協してもよいところとそうでないところを見分けることだ。その境界線を見極めなきゃならん——そして、境界線に近寄らないことだ。その上を歩こうなんて思うと……」

トーマスは両手を組んでテーブルを見つめた。「ジュード、そんなことをしたらどうなるかわかりきっている。道を踏み外してしまうんだ。自分は大丈夫だと思っても、必ず踏み外す」トーマスは咳払いをし、ひきつるほど唇を引きしめた。「お前には幸せになってほしい。この世界は障害だらけかもしれないが、おれがお前の幸せを願っていることは建造主様をご存知だ」

トーマスはぼくと目を合わせないまま、視線をあちこち動かした。そしてもう一度咳払いした。以前なら、こんなとき、ぼくはテーブルを回って不器用にトーマスを抱きしめただろう。今夜はそうしなかった。ぼくの心は父を求めていたが、ぼくはもう小さな子供ではなかったし、とにかくぼくはそうすることができなかった。

ぼくたちは無言のまま夕食を終えた。

#

翌日の日曜は礼拝へ出かけた。ぼくにとっては、ギルド暦で3週間ぶりの礼拝だ。トーマスとぼくは、細長く天井の低い礼拝堂の後ろの方の席に座った。礼拝堂は、クォーターの端、PMゲートとは反対に位置するADゲートの近くにあった。金属製の隔壁はつや消しされた灰色で、6機械のうち3つが左の隔壁に、別の3つが右の隔壁に描かれ、説教壇の後ろの隔壁には差し金が描かれていた。

〈斜面〉分区の集会はいつも3番目で、昼近い時間帯だった。聖餐が終わり、職長ソールの説教中に、2、3列前の右側の席にニコデマスが座っているのに気付いた。ニック

は隣の者から何か耳打ちされて満面の笑顔で金色の頭をのけぞらせている。隣は黄色に輝く長い髪の持ち主だった。

ニックの隣にいたのはサリアだった。

ぼくは何度もまばたきして目を凝らした。それから説教の間中ずっとそわそわしていた。単純素材でできた会衆席は冷たくて硬く、どんなに座り直しても居心地よくならなかった。礼拝の後で職長から個人的な指導を受けることになっていたけれど、礼拝が終わるとすぐにぼくはキャビンへ帰った。トーマスには腹がいたいとかなんとか言い訳した。

明日から2日間は学校だ。仕事が休みの間に授業の遅れを取り戻さなければならない。これほどの遅れをどうやったら取り戻すことができるのか、わからなかった。

#

水曜日になった。職場のほかの者にとっては一曜日だ。レニーは朝一番に休憩室で荷役人を集め、特殊業務希望者は後2日以内に申し込みと真空対応資格証明書の提出を済ませること、と念を押した。レニーがぼくの方を見たが、ぼくは目をそらした。妙なことだ——昨日までの2日間、学校でニックを避けて過ごし、一曜日に来るのを待ちかねていたのに、今日はここでレニーを避けて過ごすことになりそうなのだから。曲がった釘のような自分が情けなくていやになる。

今日の仕事は、ヴァン＝マアネン星の<sup>エクソモーフ</sup>外成変異体コロニー行きサンダー級宇宙船〈もっと冷たい方程式〉号の荷積みだった。きついけれど単純な作業で、ここ数日で初めて緊張がほどけた。気分よく仕事に没頭したが、昼食休憩をとった後は、視界の隅に入る時計が気になって仕方なかった。重力のある世界へ戻る時間が刻々と近づいてくる。

仕事が終わりに、シャワーを浴びた後、ぼくはデレクに食事に連れて行ってくれと頼んだ。デレクからは仕事帰りに何度か食事に誘われていたのだけれど、トーマスにばれたら怖いし、ここのカフェテリアにぼくが食べたいようなものがあるのか不安だった。だけど今日はどうしても話がしたかったから、食べ物のことは我慢しようと思った。

デレクは喜んで、外縁から2レベル内側にある薄暗いカフェテリアへぼくを案内した。どんな所かよくわからないままついて来たとはいえ、ダークレッドの壁と低い天井に囲まれたこんな薄暗い洞窟のようなところだとは思っていなかった。見えない手で爪弾かれる軽やかな弦楽曲が静かに流れ、室内の空気はやや湿り気を帯び、かすかに鉱物のおいがした。葉の生い茂る植物が柱やカーテンのように視界を遮っているのも隅々までは見渡せないものの、そここのテーブルに2人、3人、あるいは4人の客がいるのが見える。ところどころ左右非対称になった客の顔がオレンジ色の灯りに照らされていた。暗いせいかもしれないが、彼らの奇怪な容貌にも初めのころほどおぞましさを感じなく

なった。

フード付きの長くゆったりした黒い服の女が、葉が生い茂る迷路の中をテーブルへと案内した。黒い塗装に小さな白い点が散りばめられた隔壁のそばの席だった。革新素材でできた、体にぴたりと沿う椅子に腰を下ろして初めて、その隔壁が実は隔壁でないことに気付いた。それはビューポートだった。厚さ 15 センチの金属に大きな穴を空け、そこにガラスか何かがはめ込まれている。

「すごい！」ぼくは思わずつぶやいた。明るく輝く星々に目が釘付けになる。

「お食事が終わるまでに、ここからネザーハイムとフレイヤが見えますよ」フードをかぶった女は言った。「とっても壮大な光景です」そう言って空中で不思議なしぐさをしてみせた。「さて、本日のスペシャル料理ですが……」

「できたら……連れのために、印刷したメニューを持ってきてもらえないか」デレクがぼくの方をあごで指して言った。

「はい、かしこまりました」女はそう言うと、煙のように影の中へ消えた。

テーブルの表面には淡いオレンジの光が渦を巻き、そのせいでデレクの肌は磨いた石のように見える。目は中で火が燃えているみたいだ。「ご感想は？」デレクが聞いた。

「想像してたのと全然違うよ。カフェテリアってもっと、何と言うか、実用本位なところだと思ってた」

「カフェテリア、か」デレクの目が愉快そうに光る。「そりゃそうだろうな」

フードの女が、料理の一覧が書かれた紙を持って戻ってきた。デレクから食材のほとんどが水耕栽培ものだと説明されて驚いた。「ものすごく高いんだろう？」口の中に唾がわいてくる。「とてもそんなお金はないよ。絶対払えない」

「大丈夫、落ち着けよ」デレクは言った。「誰でもこういう食事のクレジットを月に 1 度もらえるんだ。ぼくは使わなかったクレジットが 2 回分残ってるし、君だって未使用のままのクレジットが少なくとも 12 回分はあるはずだ」

ぼくは驚きと戸惑いを押し隠すようにメニューを見た。氷山に乗って広大な海をさまよう気分だ。中身の見当もつかない料理の数々。ほとんど無作為に決めて、前菜におろしチーズと削りトリュフのパスタ、主菜にカボチャのスパイシー・タルトを選んだ。注文は、ぼくの目に見えない方法でデレクが済ませてくれた。デレクを選んだのは、果物の盛り合わせ、野菜とナッツのルーラードだった。

デレクは両手を組んで身を乗り出した。「さて、何か聞きたいことでもあるのかい、ジュード」

「うん、まあ、いろいろ」ぼくはそう言って肩をすくめた。「宇宙で暮らしたらどんなだろう、って今日考えていたんだ」

デレクは笑いながら首を横に振った。「ぼくたちは宇宙で暮らしているじゃないか。知らなかった？」

「そうじゃなくて、宇宙にさらされて、ってことだよ。外成変異体<sup>エクソモーフ</sup>みたいに、何もない空間に浮かんでいるのってどんな感じだろうって」

「いや、何もないわけじゃない。格子の枠のようなものはある。その中でエクソモーフのコロニーは増大するんだ」

「でもそんなのではないも同じだし、それだって宇宙空間にさらけ出されているんだよね」ぼくは今日まで、そんな生物、そんな人類がいるとは全然知らなかった。今日仕事中にフィッシュボウルの表示で知ったのだ。「エクソモーフになるほどの改造なんて想像できる？」

「すごく大きな改造だな」デレクは言った。「軽々しくはできない」

「ぼくたちの班にはそれほど大きな改造をしている人はいないよね。みんな見た目はほとんどふつうだ。服を着ているかぎりは」

「大幅な改造は、特殊な業務に特化したものが多いんだ。ぼくたちは単純労働者だからね」

ぼくはうなずいた。なんとなくだがその意味はわかった。一度深呼吸してから切り出した。「デレク、個人的なことを聞いてもいい？」

デレクは両手の指を組んでテーブルに置いた。暗い照明でよく見えないけれど、初めて会ったときは手のひらだけが緑色だったのに、いまはそれが腕の途中まで広がっており、耳も緑がかってきていた。ぼくを見るデレクの目は無防備でまっすぐで、ぼくは落ち着かなかった。デレクから見える世界のことを自分は何も知らないのだと実感する毎日だったからなおさらだった。ぼくの世界の上に、下に、そして周囲を取り囲むように、幾重にも広がっている世界。「そりゃわからないな。君はどう思う？」デレクは言った。

「わからない。じゃ、とりあえず聞くけど」デレクについては、仕事中にフィッシュボウルの表示で多少はわかっていた。見ようとしなくても見えてしまう。たとえば、デレクには生物学上の母親が3人もいるという不可解な事実。どれをとっても、ぼくの好奇心をかきたてないものはなかった。ぼくは光るテーブルを見つめ、大きく息を吸った。

「ぼくはその、何というか、君の改造に、何か実用的な目的が、機能上の目的があるのかなと思って。つまり、その青い肌が緑色になったりするのは何のためなの？」

「愛するに時があり、憎むに時があり」デレクはにやにやして言った。「青くなるに時があり、緑になるに時がある」

ぼくは怒って息を吐いた。「君はいつもそうやってマニュアルを茶化すネタを探してばかりいるわけ？」

デレクはかぶりを振った。「わかってるだろう、ジュード」そう勢い込んで話し出す。「《聖書》と呼ばれる書物はテトス・グラントが独自の総称的書名をくっつけるよりずっと昔から存在していて、人間の手による聖典としてそれほど謎めいたものでも何でもないってことくらい」

「大職長テトス様は単に書名を変えただけじゃない。建造主様から靈感を受けて、きちんと書き直したんだ——」

デレクはぼくの唇に触れそうなくらい人差し指を突き出し、話をさえぎるようにもう一方の手を振った。「わかった、それはいい。だけど、テトスがマニュアルを一から書いたんじゃないことはわかっているよな」

「ああ、わかったよ、それは認める」ぼくは言った。「それで、色が変わるのはどうして？」

デレクは椅子に背中を預けた。「ああ、その話か。別に実用的な理由はないんだ。この肌の色は、これといって何かの役に立つわけじゃない。見た目の色がほとんど無作為に変化するだけなんだ。次に何色になるのか自分でもわからない」

「じゃあ、何でそうしたの？ なんのために？」

「自分で楽しむためさ」そう言ってデレクはちょっと微笑んだ。「鏡の中に自分と自分じゃないものが同時に映る。次にどんな色になるのかいつも謎だ。ずっと見ても飽きないよ」それからデレクはまた体を前に乗り出した。次に言った言葉は、無理にやさしくしようとしているように聞こえた。「どうしてそんなことを知りたくなっただい、ジュード」

ぼくは首を横に振った。「別に。理由なんてないよ」

「例の仕事のことを考えているんだろう？ 四曜日の真空作業のこと」

ぼくはビューポートの外の星に目をやったが、外の景色がぐらりと足元に回った気がして、平衡感覚を失いそうになった。「まあね」ぼくは言った。

「言っとくけど」デレクは明るい笑顔の名残を残して言った。「君がそれをやったら、うちの班の仲間の多くはがっかりすると思う。みんな君を見守る気持ちになってきているから、自分たちが悪い感化を与えたんじゃないかと感じるだろう」

「でも、これはぼくが決めることだ」ぼくは言った。

「それはそうだ」

別の女が前菜を運んできた。黒い服の下から飛び出た太いしっぽの動きが、両手で平衡を保っている盆と対照的だ。料理のおかげでぼくもデレクも会話の重荷から解放された。この奇妙でぜいたくな料理の味はよくわからなかったけれど、食べたことのない強烈な料理であることは確かだ。ぼくは残さずたいらげた。

食事が始まってから、デレクはいつになく落ち着かない様子だったが、主菜が来てぼくがタルト——すばらしかった——を半分食べた辺りでこう言った。「ジュード、ぼくも一つ聞いていいかな？」

「うん」ぼくは口を動かしながら言った。

デレクはちょっと言いよどんでから言った。「君のお母さんにいったい何があったんだい？」

喉に食べ物がつまりそうになる。「どうして母のことを知っているの？」

「ごめん、のぞき見するつもりはなかったんだ」デレクは、わずかに使った跡のある布ナプキンで口元をぬぐった。「君の方を見るたびに次々と表示される君の系図を見ないでいるのは難しくて」

「母はぼくが子供のころ、4歳か5歳のときに亡くなったんだ」ぼくはフォークを置いた。努めて目を動かさないようにする。「どうして亡くなったのかはよく知らない。父はその話をしたがるが、ぼくも無理に聞こうとしなかったから」

デレクが困ったような顔で口を開いた。一瞬、母の亡くなった理由をデレクが教えてくれるような奇妙な予感があった。デレクはぼくよりも母のことをよく知っているのではと思うと、目の奥がずきずきしてくる。

けれどデレクが言った言葉はこうだった。「お母さんのこと、よく考えるのかい？」

ぼくはうなずいた。「いつも考えている」

それを聞いてデレクはとても悲しい顔になり、ぼくは青い鏡で自分の顔を見ている錯覚に陥った。そればかりか、目まいを感じるほどの激しい切望から、それは一瞬母の顔に見えた。その幻影は、デレクが突然椅子から立ち上がって断ち切られた。デレクは緑色の両手でぼくの顔を包むと、かがみこんで口にキスをした。そして1秒か2秒、永遠に感じられるほどぼくの顔を見つめ、それから椅子に腰を下ろした。

ぼくは息を止めたまま、顔を窓に向けた。窓の外にネザーハイムが見えてきていた。赤と黄色の渦巻き模様が付いた巨大な綿菓子のような。破裂寸前の甘くて気持ちの悪い果物のようにも見え、ちょうどぼくの心臓そっくりだった。ぼくはデレクから目をそらしたまま、じっと動かなかった。脈が毎秒100回打っている気がする。

「最後まで食べられそうにない」ぼくは食べかけのタルトの皿を脇へ押しやった。

「ジュード、悪かった」デレクはまっすぐぼくを見て言った。

「どうしてあんなことを？」ぼくは言った。何か質問をする方が、どなったり、叫んだり、テーブルを叩いたりするよりはましだ。

デレクは両手を上に向けた。緑色の手のひらが、暗い照明で真っ黒に見える。「君たちにとってキスがどういう意味を持つか一瞬忘れていたんだ。つい忘れてしまったんだよ、本当だ。ぼくたち——少なくともぼくの属する集団では、友達同士のあいさつなんだ。友情や励ましの印とか、肩をたたくのと同じようなもので、特に性的な意味合いはないんだよ」

「だけど、さっきのはどうして？」

デレクはため息をついた。「ジュード、君がすごく悲しそうだったからだよ。ぼくには耐えられない。孤独と悲しみは耐えられない」彼は首を振った。「ぼくが君と同じくらいの年齢だったころのことを思い出したんだ。あのころのぼくに誰かがそんなふうにしてくれていたらと、ときどき思う」

本当だろうか？ ぼくにはわからなかった。ビューポートへ目を移す。ネザーハイムは視界の外へ移動しつつあった。眼下に見えるその星でカラフルな大気が渦巻いているように、ぼくの中でも感情が煮え立っている。席を蹴って飛び出したかった。宙返りでもしてやりたかった。デレクの肩をつかんで揺さぶり、壊れた人形のように首を振り落としてやりたかった。

ぼくはニコデマスのことを、ニコデマスに抱いていた自分の気持ちのことを考えた。「悪いけど」ぼくは言った。「レベル6行きのエレベーターまで送ってくれる？」  
「もちろんさ、ジュード」

デレクの声に含まれる思いやりと気遣いが耐え難かった。ぼく自身の心の痛みも。

#

ステーションにあふれる野蛮な人々と刺すような視線から逃れて家に着くと、ぼくはひざまずいた。本当は建造主様にお許しを、このような墮落した状況に甘んじていることへのお許しを願うべきだが、ぼくはそうせずに、床の中央にある木製衣装箱のダイヤルを回した。トーマスはまだ帰っていない。あと1時間は帰らないはずだ。ずっと前にぼくがトーマスの後ろからダイヤルの番号をこっそり見ていたことをトーマスは知らなかった。音がきしむ、明らかに旧技術のきつい蝶番の向こうへ蓋を開ける。中には宝物がつまっていた。

一番上にたたんであった服を崇めるようにして取り出す。ぼくの心に幻のようなカイヤの声が蘇る。これから行くところではこれはもういらぬから置いていく、とトーマスに言う声。ぼくはその淡いグレーの服を広げてなでた。胸に〈斜面〉が刺繍されている。それから震える手で頭からかぶり、袖に腕を通す。これまでにもう5、6回同じことをしていた。

肩と脇がきつい。前に着たときよりずっときつくなっている。背中ボタンは掛けられそうにない。この服をなんとか着られるのも、きっとこれが最後だろう。

嗚咽がこみあげる。いますぐ天使の翼でぼくを連れ去ってほしかった。

#

ネザービュー・ステーションのような回転する大きな輪の中で回転方向へ歩くことは、終わりのない斜面を上るのと少し似ている。回転によって足の方が上半身よりわずかに速く前へ進むので、よく注意すると、ほんの少し後ろに反り返っているような、上り坂を歩いているような気分になる。

逆に、反回転方向へ歩くと下り坂を歩いている気分になる。ただし、わずかに前へ傾

いた体と、足と円の接線の間の角度を調べると、歩行者の姿勢はむしろ上り坂を歩いているときに近い。したがって、回転する輪の縁をどちらの方向へ歩いても、斜面を上っているのと同じだと解釈できる。

ぼくの状況はあまりマニュアルに従っているとはいえ、とりわけ〈輪軸〉分区の者なら冒濫的と呼ぶような状況だ。それでも、分かれ道に来ると、どの道を進んでも上り坂になる、建造主様へ近づく道になる、という思いがした。

## #

食べ慣れないぜいたくな食事のせいで、よく眠れなかった。朝起きて、貧しく味気ないものに見える朝食を用意しながら、衣装箱とその中身がいじられていることをトーマスに感づかれなかと不安だった。けれど、トーマスはマニュアルに集中しながら朝食を食べ終え、ぼくが今日は残業するかもしれないと言っても眉一つ動かさなかった。

ぼくは早めにハブに着き、二曜日の勤務開始時間よりかなり前に球形オフィスでレニーをつかまえた。「真空対応処置について、もう少し教えてほしいんですが」ぼくは前置き抜きで切り出した。「その、どうすれば受けられるんですか」

レニーは、原子から放出される荷電粒子のように椅子から飛び下りた。「あんたが未改造じゃなければ、どこにいてもジェフに聞くことができるんだけど」ハッチの枠にぶらさがって、醜い顔をぼくの方へ突き出す。「そうじゃないからジェフルームへ行かないといけない。ジェフルームならこの近くにも1つあるわ」

レニーはさっさと歩き出した。「あの」ぼくは急いでレニーを追いながら言った。「父があなたのことをすごく怒っていました」

レニーは首だけ振り向いてにやりと笑った。「ああ、特殊業務をあんたに勧めたから？ わたしのところに文句言ってきたわよ。だからって、トーマスにはどうもできないわ。規則なんだし、トーマスだってそんなことはわかってるのよ。文句なんか言える立場じゃないくせに。そもそも未改造のあんたを雇ってくれて頼んできたときも無茶な男だと思ったけど。まあ、トーマスはトーマスで父親としての台本に従っているんでしょ。わたしが自分の台本に従っているみたいに」

3つ並んだハッチの手前でレニーは足を止めた。それぞれのハッチに、点灯中の電灯を象徴する古風なマークが描かれている。この仕事を始めて以来、これらと同じようなハッチを何度も目にしていたが、何なのかは知らなかった。

レニーは下半身の腕で立ち上がり、一番手前のハッチを軽くたたいた。そのハッチの表面は光っている。「さて、わたしの台本の続きはここ」レニーは言った。「これがジェフルームよ。ここではジェフに何でも聞きたいことを質問できる。ジェフはどんな質問にも答えてくれて、それ以上のことも教えてくれる。こういうふうに電球が光っていれ

ば、その部屋が空いていて利用可能だという意味よ。じっくり話を聞いてみるといいわ。ただ、勤務開始時刻に1時間以上遅れるようなら、ジェフからわたしへ伝言を送ってもらってちょうだい。それで伝わるから」

レニーがハッチの中央にあるパネルに触ると、シューと静かな音をたててハッチが開いた。

「目と耳をしっかりと開いてね」レニーに言われ、ぼくは中へ進んだ。

#

「怖がらなくていいのだよ。嘔み付いたりしないから」

穏やかなテノールの声がした。この小さな真っ白の部屋のどこから聞こえてくるのかわからない。天井はぼくの頭がぶつかりそうなほど低く、前後左右は両腕を伸ばせば壁に手が届きそうなくらい狭い。診察用のような体を包み込む寝椅子が真ん中においてある。ぼくはうろたえて後ろを向いた——ハッチは音もなく閉じていた。ハッチの輪郭は壁に溶け込みほとんど見分けがつかなくなった。

「座りなさい、ジュード」声が言った。「話すことがたくさんある」

室内は暖かかったが、ぞっとして鳥肌が立った。「どこにいるんですか？」ぼくは聞いた。「どうしてぼくの名前がわかるんですか？」

「わたしはお前が生まれたときからお前のことを知っているのだよ、ジュード。ようやく二人で話をすることができてうれしい。お前たちギルドの者とこのような機会を持つことはとてもまれだ。ただ、座ってくれた方が話しやすい。どうか」

冒涇だ！ ぼくの理性が叫ぶ。偽の神々だ！ けれど、ぼくは寝椅子に横たわり、クッションに体を沈めた。体が椅子に包み込まれ、恐る恐る頭を預けると、くぼみにすっぽりとはまった。

一人の男がぼくの前に現れた。大きな腹、流れる白い髪、ふさふさした白い口ひげの男で、大きな白いカバーオールを着ている。木の差し金を持っていた。「セラ」男は言った。

ぼくは驚いて飛び上がったが、男はぼくの方へかがみこんで落ち着けというしぐさをした。「建造主様」ぼくはあえぐように言った。

男は首を横に振った。「わたしが建造主様と似ているように見るとしたら、慈悲深い英知の姿へのお前の思いが強いからに過ぎない。わたしの方では自分を偉大なものに見せる意図はないのだが」彼は手に持った差し金を見た。「こんなものは役に立たない」彼がそう言って差し金を後ろへ投げ捨てると、それは消えた。

「あなたはどなたですか？」ぼくは寝椅子から起き上がろうともがきながら聞いた。

男の姿がぶれて消えかけた。「お前が落ち着いて座っていれば、もっとちゃんと話せ

るのだが」彼は言った。「わたしもお前も」

半信半疑でぼくが寝椅子に体を戻すと、男の像は鮮明になった。男がぼくの胸に手をあててそっと押し戻す感触まであった。

「わたしはジェフだ」男は言った。「姓はないが、知りたければバージョン番号は教えられる」

男からは、汗と煙と何か麝香っぽいものが混ざったにおいがかすかにした。「何をおっしゃっているのか、よくわからないのですが」ぼくは言った。

「それはわかっておる」男はにまりと笑った。どこからともなく別の椅子を取り出して、ぼくの膝近くに座り足を組んだ。「だが、お前は聞きたいことがあってここへ来たのだろうか？ それなら聞くがよい。何でも聞きたいことを聞きなさい。いくらでも好きなだけ聞きなさい。わたしはそのためにいるのだ」

「あなたは何ですか？」ぼくは聞いた。

「非常に高度な情報検索システムだ。かつて、検索エンジンと呼ばれていた時代もあったが、わたしはそれよりずっと高機能になっている。診察医でもあれば、内科医、外科医、教師、個人指導員でもある。外交官であり、通訳者であり、監察員でもある。法律相談者、弁護士の役割も果たす。それからランプの相手もする」

「ジェフという名前の由来を教えてください」ぼくはデレクが名前を変えていることを思い出して言った。「どういう意味があるのですか？」

ジェフは口ひげをなでた。「特に意味はない。単に響きが気に入っただけだ。自分に似合っている気がしたのだ。お前の名前の由来は何だね？」

ぼくは虚をつかれた。「マニュアルです」

「ネブカドネザルという名じゃなくてよかったな」

きっとデレクはここで憎まれ口を覚えたに違いない。「あなたはどうやって姿を現しているのですか？ この椅子が関係あるのですか？」

「その椅子はとても関係ある。お前の大脳皮質視覚野に作用するマイクロ波インターフェイスを生成しているのだ。聞きたければ詳しい技術的な説明をしてやってもいいが、もっと緊急の質問があるのではないかね？」

ぼくはついおもしろくなって、何度も頭を上げたり下ろしたりしてジェフの姿が消えてはまた現れるのを確かめた。

「気をつけなさい」ジェフは映像の椅子から立ち上がって言った。「気持ちが悪くなるぞ」

そのとおりであった。頭がずきずきしてきて部屋がぐるぐる回った。胃の中の朝食がこみあげそうになる。ぼくはあおむけに横たわり、ジェフがぼくの額をさすった。ジェフの指はひんやりしていたが、ぼくの額から噴き出る汗は止まらなかった。ぼくは何度も深呼吸をし、やわらかい肘掛に指を食い込ませた。

「ぼくの上司が勧める真空対応処置について教えてください」ぼくは目をぎゅっとなつむったまま言った。「どういう仕組みなのですか？」

「たいしたことはない」ジェフは励ますように言った。「急激な気圧低下に備えて肺の周りに細胞補強壁のようなものを装着するのだ。それによって肺を密閉し、しばらくの間、血中ガスの膨張を阻止して死を防ぐ。この補強壁には、血液から肺に送られる二酸化炭素から酸素原子を抽出する機能もあるから、同じ空気を循環させて呼吸を続けられる。もちろん、それもしばらくの間だけだ。これはフィルターのようなもので、いずれは炭素が詰まって役に立たなくなる。それでもとにかく1時間は耐えられる。それだけあれば、救助がくるまで十分もつだろう。ほとんどの場合はね」

ジェフが話すとそれは筋の通った話に聞こえた。ぼくはもうジェフの方を見ていて、ジェフは自分の椅子に戻っていた。「処置を受ける費用は高いんですか？」どうか、そうだと伝えてくれ。

「ちっとも高くない」ジェフは答えた。「それに業務上必要なら費用はステーションが出してくれる。ちなみに、お前の場合はこの条件を満たしている」

「副作用はありますか？」

「処置を受けた後は多少息切れがしたり、少しめまいがしたり、ふらついたりするかもしれないが、一日もすれば肺が適応してくる。それだけだ」

ぼくは大きく息を吸った。「その処置そのものは——複雑そうですが、どれくらい時間がかかるんですか？」

「20分くらいだ」ジェフは首をかしげて答えた。

「20分！ たった20分で？」

「ただし、その日の仕事は休まなければならない。回復と経過観察のためにね。その日の分の給与は出る」

「だけど——だけど、どうしてそんな簡単に？」ぼくは言葉を探した。「それは、つまり、生体改竄の処置でしょう？ そんな短時間でできるはずありません」

「確かにお前の言うとおりで、ジュード……もしゼロから行うのならそれほど簡単ではない。だが、今回の処置は違う」

ぼくは息を飲んだ。心臓が凍りつきそうだ。「どういう意味ですか——どういう？」

ジェフは立ち上がり、両手を後ろで組んだ。「お前は、お前たちの言う生体改竄者なのだよ、ジュード。ネザービュー・ステーションの機械信徒ギルドに属する者は全員そうだ。それは生まれる前からのことで、胎児のうちに母親の血液を通してナノ情報が与えられている。お前の中のナノ情報は、適度な健康の維持と、わたしがお前を監視する用途にしか使われていない。だが、本当はもっと多くのことができるのだ。はるかに多くのことが」

「だけど——だけど、なんのために？」涙がわいてくる。「どうしてそんなひどいこと

を？ そんな——そんな恐ろしいことを！」

ジェフはつらそうな顔をした。「ジュード、このステーションの脆弱な環境をどうかわかってほしい。ここには 200 万人の永住者がおり、さらに毎月何百万人もがここを通過している。なんらかの方法で監視もせずに人々を野放しにするわけにはいかないのだ」

「だけど、そんなのは間違っている。これはぼくの体だ！」

「ジュード、わたしの保護がなければ、お前の体はクォーターから初めて出たときになればらになっていただろう。修練によって筋肉は強化されても、低重力での生活は骨を弱らせる。いままで食べてきた食物に入っている栄養補助剤がその進行を抑制しているのだよ」

ぼくはかぶりを振った。「嘘だ」

「わたしは嘘は言っていない、ジュード」

「いまのことを言ってるんじゃない。これまでのことだ！ ぼくたち、ぼくたちギルドの民が信じてきたことは全部嘘だったんだ！」

「ジュード、これがお前に話す最初のお前だった。誰であれ、ネザービュー・ステーションの仮住民となる年齢、10 歳に達すると——ギルド暦でいうと、13 と 3 分の 1 歳だ——このようなことを知る権利が与えられる。だが、残念なことに、ギルドでは 15 歳、ギルド暦で 20 歳になるまでこの事実を隠しておくことができる。それでも質問して答えを聞く権利は与えられたままだから、お前もいまここで聞くことができたのだ。しかし、聞く権利があるとすら知らなければ、どうにもならない」

ぼくは首を振り続けた。「ぼくは信じないぞ。もしそれが本当なら——それが本当だとしたら、みんなは知っていたってことじゃないか。大人はみんな——父も、みんな知っていたなんて」

「実はそうではない」ジェフは悲しげに唇を結び、ぼくの腕に手を置いた。「聞く権利があると知っていることと、実際に聞くことは別だからだ。20 歳になるころには、ほとんどの者は知りたいと思わなくなるのだ」

「ぼくだって知りたくなんかなかった！」ジェフの手をふりほどいて涙をぬぐった。

「どうしてそんなことをぼくに教えるんだ？」

「ジュード……」

「いやだ！ あんたは破壊者だ！ 聞きたくない！」

ジェフはため息をついた。「わたしの知るかぎり、わたしは破壊者ではない。正直言って、わたしに嘘をつく能力が備わっているかどうかは知らないのだ。わたしは最善をつくすことしかできないのだよ」

子供じみた態度とは知りながらも、ぼくは腕を組み、目の前の落ち着き払った幻影から顔をそむけた。ぼくはしばらくそうしたまま、考えをめぐらせた。次に目を戻したと

き、ジェフはぼくを見てじっと待っていた。ぼくの体の中から力が抜けた。

「ジェフ」ぼくは小さな声で言った。「ぼくの脳を直してくれないか？」

ジェフは心配そうにぼくをのぞきこんだ。「お前の脳のどこを直すのだ、ジュード？」

「ぼくは——つまり——」

「うん？」

「ぼくはおかしいんだ」声が消え入りそうになる。「異常なんだ」

「どこが？」

「わかっているくせに」

「言ってみなさい」

ぼくは唇をなめた。「ぼくは男子が好きなんだ」口に出してみると、妙に気が抜けたような、他人事のような気分になった。「直してくれる？」

ジェフは口ひげを引っ張った。「ジュード、わたしはさまざまな治療法を教えることはできるが、性的傾向のようなものを“直す”ことはできない。お前が考えているように、お前が同性愛者だとはわたしは思わない。真実は、もっと複雑で興味深いものだ」

ぼくは驚いた。「真実と言うと？」

「お前たちのギルドは、性別を二進値で捉えがちだ。これでなければあれ、正しいものと正しくないもの、それ以外は考えない。だが、いわゆる生体改竄者は、そうした特性にはもっと多用な範囲の値があり、流動的で多元的なものだと捉える。二者択一で決められるものはなく、アイデンティティだって、方眼上の特定の点に永続的に定められるとは限らない」ジェフは建造主様のような謎めいたしぐさで両手を広げた。「さて、ここまでは単なる予備知識だ。だが、お前はどうも多価身体認識違和感を訴えているようだな」

「多価……何？」ぼくは胃がむかむかしてきた。

「簡単にいえば、お前の体は男性だが、内部の人格は女性に近いのかもしれないということだ。もちろん完全に女性というのではないが、どちらかといえば女性に近い」

吐き気にもかかわらず、ぼくは首を振った。「まさか。違う。そんなのは馬鹿げている」

「お前はその症候を——子供として周囲から許されなかった欲求や行動を——早くから隠すことを身に着けたのだろう。だがいくら隠しても、そして古めかしい男性性を追い求める過補償に走っても、その症候は一向に消えはしない」

「あり得ないよ」ジェフの言うことは侮辱的で不快だった。「建造主様はそんな間違いはなさない」

「完璧な世界ならそうかもしれない」ジェフは言った。「だが、この世界は完璧ではないし、われわれは皆、その事実それぞれ折り合いをつけなければならない。さて、ま

ずは手始めに、わたしは治療カウンセリング・コースを勧めることも、自分でカウンセリングを実施することもできる。そしてもちろん、それを受けるかどうかはお前自身の——」

「やめろ！」ぼくは叫んだ。「やめてくれ！」

「ジュード、ともかくこの件について話だけでも——」

「嘘つきの、偽りの機械め、黙っててくれ！ 考えられないじゃないか」

ジェフは両手を膝の上で組み、ぼくは頬の内側を噛みながら白い天井を見つめた。こんな破壊者の忌まわしい嘘にうっかり騙されるところだったと思うと腹が立つ。本当に恐ろしいことだ。いまぼくが取るべき正しい行動は——許容範囲の妥協が何であるかははっきりしている。

「受けることに決めたよ」内心の決意を押し隠すように硬い声でぼくは言った。

「受けるって——何をかね？」ジェフがたずねる。

「真空対応処置だよ。受けることにする」

「本気かね？」ジェフが疑うように言う。

「うん。ただ、念のため言っておくと、ギルドのためにやるんだ。自分のためじゃない」

「どういう意味かよくわからないが」

「ぼくが特別手当をたくさんもらえば」ぼくは言った。「それだけ早く、この墮落したステーションからみんなが脱出できるから」

「お前の稼ぎはお前のものだ。ギルドに渡す必要はない」

「いいんだ」

「それではたいした足しにならない」ジェフは言った。「ギルドの借金は膨大だ」

「いいんだ」

「ジュード、誤った幻想からそんなことをしてほしくない。ギルドの借金は膨大で、利子も払えないほどなのだ。実際、ギルドをここに住まわせておくだけでも赤字になる」

「じゃあ、どうしてぼくたちをここから出してくれないんだ」ぼくはいきり立って言った。

ジェフは首を振った。「本当に知りたいのなら、教えてやろう——それがわたしの役目なのだから。だが、お前は気に入らないだろうな」

「とっくに気に入らないことだらけだよ。言ってくれ！」

「それなら言おう。わたしはステーション全体の繁栄を考えねばならず、お前たちをここにいさせることで経済目的以外の目的が果たせるのだ。貧困階級が永続的に存在することは、それ以外の人間に、この擬似社会主義・脱貧困楽園に完全参加する意義を植え付ける役に立つ。優越感はある種の満足感を与えるのだよ」

「つまり、ぼくたちギルドの民は、貧困生活がいかに悲惨かという見本として貧困生活

を送っている？」

「あらかじめ、お前は気に入らないだろうと言ったはずだ」

ぼくの怒りは冷えて固まり、心の中で冷たく透明な石になった。「ぼくの好き嫌いまでスーパーコンピューターではじき出したみたいに言うんだな。ぼくもあらかじめ、処置を受けると決めたとやったはずだ」

「ふむ！」ジェフは驚いたというふうに眉を上げた。もっと議論を続けようとするのかかと思っただけ、違った。「では、真空対応処置を受けることに同意するのだね？」

ぼくは短くうなずいた。「そうだ」

「よかろう」ジェフは静かに言った。神妙とも言える声だった。「お前の上司には今日1日かかると伝えておく。いますぐここで始めるとしよう」

ぼくは寝椅子の上で体をまっすぐに伸ばし、腕を両脇に付けた。棺の中で蓋が閉められるのを待つかのように。

#

「ここからひとりで大丈夫かい？」デレクが聞いた。

ぼくとデレクはPMゲートの前にいた。辺りのにおいと騒がしさと湿った空気はいつもどおりだった。デレクの腕に支えられているおかげで、のしかかる重力にもなんとか耐えられた。ぼくは少し朦朧としながらうなずいた。「中に入れば楽になると思う。クォーターGに戻れば」

処置が終わりに近づくと、ジェフはぼくを起こして誰かに送ってもらった方がいいだろうと言った。ぼくはあまりよく考えないままデレクの名前を伝えた。後から本当にそれでよかったのだろうかと思いましたが、結局はそうするほかなかっただろう。ジェフはデレクに連絡し、ジェフルームのハッチがあいたときには、デレクがそこで待っていた。

ぼくから腕を離したデレクは、ぼくがひとりでよろよろと歩き始めるさまを心配そうに見ている。「帰ったら……その……面倒なことになるのかい？」

「誰にもばれやしないよ」ぼくは言った。「見た目にはどこも変わっていないんだから」

デレクは何か言いたそうだったが、何も言わずに片手を差し出した。いまは緑の部分が多くなっている。目の虹彩の色まで変わっていた。「ジュード、もしも……もしもぼくのところに泊まりたくなったらいつでも来ていいからな。何も気にしなくていい。ただの避難所だと思ってくれ」

ぼくは胸がいっぱいになってうなずいた。ありがとうと言いたかったが、言えなかった。ぼくは目をそらし、レバーを引くとゲートをくぐった。

空耳かもしれないが、ぼくの後ろでゲートが閉まる時、デレクが「セラ、ジュード」と言ったような気がした。

クォーターに戻るともう夜で、通路に人通りはなかった。低重力でもまっすぐ歩けない状態だったから、人目がなくて助かった。ジェフは、心配いらない、朝になれば元に戻ると言っていたが、家に着くまでの間にクォーター内で変に人目についたら、心配いらないでは済まなかつたらう。

こっそりとキャビンに入ると、中は暗く、寝台に横たわっているトーマスが動く気配はなかった。ぼくはできるだけ音を立てずにそっとカバーオールを脱ぎ、自分の寝台を下ろし、毛布にもぐり込んだ。あおむけになっても、安らぐことも目を閉じることもできなかった。今日は一日中、いまと同じような姿勢で過ごした。ジェフが言ったとおり、処置は 20 分しかかからなかった（といっても、意識がなかったから後で聞いただけだ）が、それからずっと、勤務終了時刻を過ぎててもまだ、ぼくはうとうとした状態で横になって回復を待っていた。ジェフはもっと休ませたそうだったが、一晩家に帰らないものならトーマスは激怒したであらう。

ふと、トーマスが座っているのに気づき、ぼくは心臓が止まりそうになった。ぼくが寝たふりをしてしていると、トーマスは狭いキャビンをそっとこちらへ歩いてくる。いまのぼくにはトーマスと話をする気力すらなかった。

「ジュード」問いかけるような押し殺した声だ。

片目で盗み見ると、暗闇の中で、トーマスの顔が太陽の燃え殻のごとくぼんやりと灰色に浮かび、ぼくを見下ろしていた。

「ジュード……息子よ」トーマスは、不安定なモーターの音のように途切れがちなため息をついた。「おれはいろいろ考えた。懸命に祈った。お前をあんなところで働かせたのは間違いだったよ。やめたければやめていい。それでも二人でどうにかやっていたさ」

ぼくが実は起きていて暗闇に目を見開いていることに、トーマスは気付いているのだろうか。それは独り言のように聞こえた。けれど、かがみこんでぼくの髪をなでようとしたとき、トーマスは顔を近づけてきて眉を寄せた。

「ジュード？」声が震えている。「あいつらは、お前に何を……お前はいったい何をした……？」

トーマスの手が中継切替装置の磁気アームのようにぱっと離れた。そしてぼくが身構える間もなく、トーマスはすぐに我に返ってぼくの首と片脚につかみかかり、寝台から引きずり下ろそうとした。

「お前はなんてことをしたんだ！」そう叫ぶトーマスに体を引きずられ、暗い部屋がぐらぐら揺れて見えた。ぼくの脚をつかんでいた手が外れて両膝が床に落ち、首にかかったトーマスの手が喉に食い込む。ハッチの下の方へ横ざまに投げつけられ、ようやくト

トーマスの手から逃れたと思うと、恐ろしいほど明瞭な低重力の中で、トーマスの片足が勢いよく後ろへ引かれるのが見えた。ぼくのわき腹を狙っている。

これまではトーマスの体罰に反感を感じたことなどなかった。いつも正当な罰を受けているものと信じ、あきらめのような気持ちで受け入れてきた。だけどいまは、こうして床に投げ出されて、不正と暴力に虫唾が走った。

とっさにぼくは体を丸め、蹴られる直前にトーマスの足を両手でしっかりつかむとハッチの方へ勢いよくねじった。トーマスは両腕を回しながら顔から隔壁にぶつかった。

トーマスの叫び声で照明がつき、突然のまぶしさの中、ぼくはキャビンの反対側の隅へ必死に這って逃げた。トーマスが床に崩れ落ちると、ハッチにいやな赤い染みが付いていた。ぼくは目まいに耐えながら立ち上がろうとした。息が苦しく、嗚咽と吐き気が交互にこみ上げる。

トーマスは両手で頭を抱えて床にうずくまった。「ああ、建造主様」半ば咳き込み、半ば泣いている。「ジュード、お前は何をしたのだ？」

トーマスにぼくの改造が見抜けたとしたら、その理由の一つしかない。「父さんには見えるんだろう」ぼくは酔っ払いのように首を前後に揺らした。「父さんも生体改竄者だったんだ。父さんは偽善者だ」

トーマスは体を転がして横向きになった。「そうじゃなかったら、おれはこの仕事をやってこられなかった」トーマスはそう言って口元の血をぬぐった。「お前やギルドのために、おれはこの仕事をしなけりゃならなかった。おれがどれだけ自分を犠牲にしたかお前にはわかるまい」

「わからないよ」ぼくは叫んだ。「教えてくれなかったじゃないか！ ぼくを向こうへ送り込んで自分と同じ選択に悩ませておきながら、自分がどうしたかは教えてくれなかった！」

トーマスは体を起こし、顔をふくと手についた血を見つめた。「おれはお前に何が正しいかは教えた。それがおれの役目だ」

「ぼくが自分じゃ何が正しいかわからないって言うの？」

「そうだ。お前の母さんもそうだった」トーマスはその先を言いよどむ。息が荒い。「お前の母さんもその区別ができなかった。一人の人間が必要に迫られてどんな犠牲を払い、そのおかげで家族が何を免れているか、わかっていなかった。だから母さんは家族をばらばらにしてしまった。母さんのせいでおれたち家族はめちゃめちゃになったんだ」トーマスは立ち上がった。「そしてお前も母さんと同じだ。罰当たりめが」

トーマスはよろよろとぼくの方へ近づいてきた。ぼくは反撃するために立ち上がろうとしたが、間に合わなかった。

ところが、トーマスが両手を差し出したのは、ぼくの肘をつかんで立ち上がらせるためだった。「さあ、出て行けばいい」トーマスはあごでハッチを指した。「出口はそこ

だ」

「出て行く？」ぼくは混乱して聞き返した。「出て行くって……いったいどこへ……」

「どこへ？ どこへだと？」トーマスははっと何かに気付いた顔をし、ぼくはまだそれがなんだかわからなかった。「ああ、ジュード」

「どういうこと？」

「そこまで知ったからには、あのことも知っているのだとばかり……」

胸が騒いだ。「あのこと？」

「母さんのことだ。母さんは……」

時間が止まったかに思えた。何だかわからない恐ろしい叫びが、はるか遠くから、ぼくだけに聞こえるどこか遠いところから聞こえてくる。

「ジュード？」ぼくの様子に、トーマスはぼくをつかんでいた手を離し、後ずさりした。

「ジュード」トーマスは両手を挙げた。「お前の母さんはおれたちにとって死んだも同然だった。あらゆる意味で死んだのと同じだった。母さんは変わってしまった。昔の母さんは死んでしまったんだ」

ぼくはトーマスに飛びつき、2歳児がだだをこねるように彼の胸をこぶしでたたいた。

「ジュード、おれはお前を守ろうとただけなんだ！ 母さんは怪物になってしまった。破壊者の化身になってしまったんだ！」

「嘘つき！」ぼくの口から唾が飛び、涙で目が曇る。「父さんは嘘つきだ！」

いまはトーマスも腕で顔を隠して泣いていた。けれど、それはぼくの情けない殴打による涙ではない。ぼくはうんざりしてトーマスを離れた。トーマスはふらふらと寝台の方へ行くとどさりと腰を下ろした。ぼくはもうためらわずに、寝台のそばの籠から自分の服をつかんでハッチに向かった。

「結局お前も出て行くんだな」トーマスは吐き捨てるように言った。「お前は何もかも母親そっくりだ」

「よかったよ」ぼくはノブを回した。「どっちみち母さんに似ている方がいい」

最後にもう一度振り返ると、煌々とついた照明の中、トーマスは獣のように背中を丸めて寝台に腰かけ、泣きはらした目をこすっていた。そしてハッチがカチリと閉まった。

#

ぼくを見下ろしているカイヤは、ぼくの夢うつつの想像に現れるカイヤと同じ姿だった。背が高く、肌は陶器のようになめらかで白く、黒い髪が流れ、実物よりわずかに大きく、ぼくの記憶の中と同じように若い。そうしてあの翼もあった。あの壮麗な白く輝く翼が夜の闇にすっと伸び、その高さは身の丈と同じほどもあった。一枚一枚の羽根はぼくの腕半分くらいの大きさだ。白い服に包まれた胸にいまにもぼくを抱いて、その翼

でこの宇宙の巨大な斜面から天高く舞い上がりそうだ。カイヤは天使だった。

「ジュード、お前には本当にすまないと思っているわ」カイヤはまつげ一本一本を数えられるほど顔を近づけて言った。「お前のために、これと同じような録画をいくつも残さなければならなかった。少なくとも、わたしが移動するたび、そして新しい改変を行うたびに。でも、お前にすまないという気持ちだけはずっと変わらない。そして、お前を愛する気持ちも」

カイヤはもちろん、実際にここにいるのではなかった。けれど、ぼくはカイヤの髪の毛の乾いた芳香、その翼の香油のようなおいが本当にそこから漂っている気がした。ぼくはいまジェフルームにいた。最初に見つけたジェフルームに入り、服を着て、大きな寝椅子にあおむけに横たわり、幻影の中に身を沈めた。こんなことが、こんな啓示が、想像したことすらないまま、ずっと前からこんなに手に届くところに潜んでいたとは、信じられなかった。正しい質問を問いかけるだけでよかったのに——それよりも、問うべき質問があることを知るだけでよかったのに。ランプの精を呼び出す魔法の呪文はとても簡単だった。「ぼくの母はどこにいるのですか？」と聞くだけでよかったのだ。

「その問いにじかに答える権限をわたしは与えられていない。だが、お前宛のメッセージを預かっている」ジェフはそう言ったのだった。

「わたしはお前と一緒に連れて出たかったのよ。信じて、ジュード。お前を連れてくることができたらと思わない日はなかった。でも、ギルドがステーションと結んだ取り決めでそれは許されなかった。そしてわたしが改変をおこなった後は、わたしはとどまるわけにいかなかった。わたしにできたのは、質問できる状態にお前が達するのを、できればギルドの多数派になるよりずっと早く達するのを願うことだけだった。

お前がこれを見ているならば、お前はそこに達したということでしょう。

わたしがこれを録画しているこの時点では、お前は10歳——ギルド暦では13歳になっている。自分から求めればこのメッセージを受け取ることのできる年齢よ。でも、その年齢では、わたしがお前に直接連絡を取ることはまだできない。わたしはお前のことを何も知らない。お前と別れて以来、お前がどんなふうに変化したのかも知らない。幼かったころと同じくらいいまもやさしい子かしら？ いまもまじめな子かしら？ 何を信じているのかしら？ どんな望みを抱いているのかしら？ どんな夢があるの？ どんなふうに変化したの？ 一つだけ確かなのは——これを見ているのだから何かを変えたのだということ。厳しい選択をし、そしてこれからは厳しい選択が待っているということよ。

わたしも、まだ変わり続けているの、ジュード。外成変異の最終段階に入るところよ。お前がこれを見るころには、わたしはきっと既にヴァン＝マアネン星のニューバウンティフル・コロニーに移住しているでしょう。ここからはるか遠くに、とても遠くにある場所よ。だけど、お前と再会するためなら、すべてを投げ出してもいいとわたしは思っ

ている。すぐに会えるわけでも、簡単に会えるわけでもないけれど、もしいまから再会への段取りを始めたいと思うなら、この録画が終わったときにジェフにそう伝えなさい。後からでもいいわ。メッセージは即座にわたし宛に送信される。わたしに届くまで時間がかかるかもしれないけれど。

わたしに会いたくないのならば」カイヤは肩をすくめ、大きな翼が揺れた。「それなら、お前は何も言わなくていい。わたしはずっと知らないまま、この録画をお前が見ていないものと思いつけるでしょう」

迷う理由など、ためらう理由などあるだろうか。「会いたいよ、母さん！」ぼくは言った。自分の顔がくしゃくしゃになるのがわかる。「会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい！」

「お前のことをとても誇りに思うわ、ジュード」カイヤは話し続けている。「お前は知らないでいることより知ることを選んだ。それはとても難しい決断よ。お前を愛しているわ。どんなことがあろうとも、これからもずっと愛しているわ。わたしのいまの姿を見てもらう日が待ち遠しい。そしてお前のいまの姿を見るのがもっと待ち遠しい」

#

マニュアルの教えによると、はじめに建造主様は根源となる6つの機械をお定めになった。この6つは建造主様の6つの相であり、すべての行いはこの6機械によって行われねばならない。それ以外の機械は不要だ。

ぼくはこれを心から信じている。だが、どんなに強くぼくがこれを信じようとも、これを真実にする力はない。建造主様の偉大なる第7の機械が、他の6つの機械を超える第7の機械の姿が、はっきりと見えてきたからには。

第7の機械はぼくだ。